

いわゆるティムール朝ルネサンス期の
ペルシア語文化圏における都市と韻文学
—— 15世紀末ヘラートのシャフル・アーシューブを中心に ——

久保 一 之

は じ め に

1 ティムール朝期の文化・学芸

ティムール朝期 (1370–1507) のマールワナンナフルとホラーサーンにおける文化の発達は、中央アジア・西アジア史上注目すべき現象とされる。ティムール朝期の文化は、モンゴル支配期後半にイラン西部で発達した文化の移入・統合という側面をもつものの、「イスラーム」、「イラン」、「遊牧トルコ・モンゴル」各々の価値観や文化の伝統が絡み合って、独自の形態を生み出している。その基盤は、イスラームを取り入れたイラン文明が、トルコ族の侵入やモンゴルによる支配を経て変質することによって形成されたものであり、近代に至るまで当該地域における文化の潮流の源であり続けた。それゆえ、ティムール朝期の文化の諸相を具体的に考察し、特徴的な事象を検討することは、いまだ不明な点が多い中央アジア・西アジア文化史を明らかにする上で、きわめて重要な意義をもつであろう。

ティムール朝期の文化の発達は、宮廷文化および都市文化の高揚に象徴され、君主や宮廷の実力者は盛んに建設活動や慈善活動を行ない、また学芸を保護した。この都市文化・宮廷文化や学芸の隆盛を「ティムール朝ルネサンス」と呼ぶことがある。ティムール朝ルネサンスの時期は、広義には始祖アミール・ティムール *Amir Timūr* (在位 1370–1405) の治世後半からティムール朝滅亡までであるが、狭義には、同王朝最後の英主スルターン・フサイン・ミールザー *Sultān Ḥusayn Mirzā* (在位 1469–1506) の治世であり、舞台は首都ヘラートである。ヘラートは古来ホラーサーンの中心都市であり、ティムール朝成立以前から都市文化の発達が見られ、同王朝第三代君主シャールフ・ミールザー *Shāh-rukh Mirzā* (在位 1409–47) の比較的安定した治世に、建設活動や学芸活動が活発化し、スルターン・フサイン時代には未曾有の繁栄を遂げた。当時この都市では数多くの学者・文人・芸術家が活躍し¹⁾、

1) 特に代表的人物とされるのは、神秘主義思想家・ペルシア詩人のジャーミー *Mavlānā Nūr al-dīn 'Abd al-Raḥmān Jāmī* (1414–92)、トルコ詩人・文人のナヴァーイー *Navā'ī/Amir Nizām al-dīn 'Alī-shīr* (1441–1501)、ペルシア文人のカーシェフィー *Mavlānā Kamāl al-dīn Ḥusayn Vā'iẓ Kāshifī* (d. 1504/05)、歴史家・ペルシア文人のミールホンド *Mirkhvānd/Amir Khvānd Muḥammad* (d. 1498) とホングミール *Khvāndamīr/Amir Ghiyāth al-dīn b. Humām al-dīn* (c. 1475–c. 1535)、能書家のスルターン・アリー・マシュハディー *Sultān 'Alī Mashhadī* (d. 1513/14)、細密画家のピフザード *Ustād Kamāl al-dīn Bihzād* (c. 1460–7)

「ヘラートは、まさしくティムール朝ルネサンスと称すべき時代におけるフィレンツェの地位にあった」とされる [グルッセ 1944: 746]。

ルネサンスを、個人の自由な精神に基づく、知的生産活動の復興および革新と規定するならば、当該時代の学芸・文化は、モンゴルの侵攻以前の伝統を復活させつつ新たな潮流を生み出しているから、「ティムール朝ルネサンス」なる表現に妥当性を見出すことは十分可能であろう。問題は、個の成長を促す都市社会の成熟の度合、および様々な分野における創作活動の特徴が、あまり明らかにされていないことである。周知のごとく、当時盛んであった王族や宮廷の実力者たちによる学芸保護がサロン文化を誕生させたことは明らかにされているが [Boldyrev 1947; Subtelny 1984; do. 1988; 久保 1990], そこで生み出された学芸作品の特徴や、広い意味で自由な精神を育むと言える都市社会の実態が、具体的に論じられない限り、「ティムール朝ルネサンス」なる表現は空虚な響きを伴い続けることになる。

2 ティムール朝ルネサンスとペルシア文学

現在の研究水準で、ティムール朝ルネサンスなる表現を支持し得る学芸分野は、建築と美術・工芸である。ドイツのレーマー H. R. Roemer は、建築について、「当時のイスラーム建築の著しい繁栄が、ヨーロッパで流行したティムール朝ルネサンスという言葉で、十分に説明してくれる」と述べ、また当代随一の細密画家ビフザードについて、「彼は、直接的自然観察と伝統的要素を結び付けて、書物彩飾ルネサンス (the renaissance of book illumination) をもたらした」と主張している [Roemer 1986: 142, 145]。確かに、15 世紀初頭からのサマルカンドやヘラートにおける活発な建設活動、および装飾を凝らした写本作成は、質量ともに瞠目に値するものであり、イスラーム美術・芸術史上の重要な研究対象となっている²⁾。しかし、同じく当時の学芸の隆盛を強く印象付けるペルシア文学については、あまり肯定的な評価が得られていない。

当該時代ペルシア語を第一の文章語としていた地域は、ホラーサーンとマールワランナフルのほか、西はアゼルバイジャンから東は現在のパキスタン、およびインドの一部をも含む。いまこの地域を「ペルシア語文化圏」と呼ぶなら、当時のヘラートは、タブリーズ、シーラーズ、サマルカンドなどを凌いで、まさしくペルシア語文化圏の中心に位置していた³⁾。この

1535) などである。上記の者はいずれも EI^2 に取り上げられており、その現存作品は、様々な角度から研究されている。

2) ティムール朝期の建造物については Allen 1981; O'Kane 1987; Golombek & Wilber 1988, 美術・工芸については Lentz & Lowry 1989; Bahari 1997 というまとまった研究成果を利用することができる。

3) ヘラートは当時のペルシア語文化圏の中心に位置付けられるが、ナヴァーイーをはじめトルコ詩人・文人が活躍し、中央アジアのトルコ古典文学たるチャガタイ・トルコ文学も確立された [菅原 1998]。トルコ文学の興隆はペルシア語文化圏に広く見られ、15 世紀末には、ペルシア語で著わされた詩人伝の中にトルコ詩人が散見されるようになり、16 世紀半ばの詩人伝 TS には「トルコ人たちとトルコ詩人たち」と題した章 (第 6 章) が設けられ、30 名のトルコ詩人が取り上げられてい

都市で膨大な数のペルシア文学作品が生み出されたが、特に散文学における歴史書、伝記、インシャー作品（公・私文書の文例）の執筆・編纂の活発化は注目に値する⁴⁾。語句の並列や隠喩を多用したその美しい文体は、モンゴル侵攻以前の、特にインシャー作品に見られた伝統の復活を意味するだけでなく [久保 1996: 210]、その後のペルシア散文の基本となり、チャガタイ・トルコ語やオスマン・トルコ語の構文にまで影響を及ぼした。さしあたって文学的・芸術的な価値判断を保留するとしても、重要な研究対象であることは間違いない。

一方、歴史的にペルシア古典文学の中核をなす韻文作品については、その量の多さが特筆されるのとは対照的に、文学的・芸術的価値は疑われており、残念ながら否定的な見解が主流である。「ティムールによる侵攻以前の、ペルシア文学の輝かしい時代が、彼の死後に再び訪れることはなかった……[中略]……詩人の数は増えても、彼らの作品の知的・美的価値は増さなかった……[中略]……慣習の重視や形式的要素の強調が生じ、インド様式の影響で古典主義化による硬直 (classicising rigidity) が進んだ」とするレーマーの説明は [Roemer 1986: 140]、ペルシア古典文学史の定説を反映した、きわめて妥当なものと言える。確かに、「最後の詩人 (khātim al-shu'arā)」と称されるアブドゥッラフマーン・ジャーミーとその作品を除いて、ティムール朝ルネサンス期に、ペルシア文学史上特筆されるような詩人や韻文作品は見当たらない [黒柳 1977: 231–32]。はたして、当時の膨大な数の韻文作品の中に、「慣習の重視や形式的要素の強調」および「古典主義化による硬直」を感じさせない、斬新な内容や革新的要素をもつ作品を見出すことはできないものであろうか。

以上のような問題意識に基づいて、ティムール朝ルネサンス期のペルシア韻文学を概観すると、都市の住民や宮廷の人々を題材とした、「シャフル・アーシュブ (shahr-āshūb)」

↙る [TS: 334–60]。しかし、当時の詩人・文人全体から見ると (TS に取り上げられた人物は七百名を超える) きわめて小さな数に留まっており [久保 1990: 43]、当該地域におけるトルコ語の文章語・古典語としての地位は、ホラズムを除いて、近代に至るまでペルシア語に遠く及ばなかった。

4) スルターン・フサイン時代に完成された主なペルシア散文作品を列挙すると、歴史書では、イスラーム世界史の Mirkhvānd, *Ravḍat al-Ṣafā'*, ティムール朝史の 'Abd al-Razzāq Samarqandī, *Maṭla'ī Sa'dayn*; Khvāndamīr, *Khulāṣat al-Akhhbār*, ヘラート史の Mu'in al-dīn Muḥammad Zamchī Isfizārī, *Ravḍat al-Jannāt fī Avṣāf Madinat Hirāt*, 伝記では、諸王列伝の Khvāndamīr, *Ma'āthir al-Mulūk*, 詩人伝の Dawlat-shāh Samarqandī, *Tadhkirat al-Shu'arā'*, 聖者伝の 'Abd al-Raḥmān Jāmi, *Nafaḥāt al-Uns*; Fakhr al-dīn 'Alī, *Rashaḥāt-i 'Ayn al-Ḥayāt*; Kamāl al-dīn Ḥusayn Gāzurgāhī, *Majālis al-'Ushshāh*, 殉教者列伝の Ḥusayn Vā'iz Kāshifī, *Ravḍat al-Shuhadā'*, ナヴァーイー伝の Khvāndamīr, *Makārim al-Akhlāq*, ジャーミー伝の 'Abd al-Ghāfur Lārī, *Takmila bar Nafaḥāt al-Uns*; 'Abd al-Vāsī' Nizāmī, *Maqāmāt-i Mavlavī Jāmi*, インシャー作品では、上に見られる文人たち, 'Abd al-Razzāq Samarqandī; Zamchī Isfizārī; Ḥusayn Vā'iz Kāshifī; 'Abd al-Vāsī' Nizāmī のインシャー作品集, およびジャーミーやサイフィーの書簡集がスルターン・フサイン時代に編纂されており、その後完成された 'Abdullāh Marvārīd Bayānī, *Sharaf-nāma*; Khvāndamīr, *Nāma-yi nāmī* も当該時代のインシャー作品を数多く収めている。

というジャンルに属する作品が、異彩を放っている。当該時代に編まれたシャフル・アーシューブ作品は、サイフィー・ブハーリー Sayfī Bukhārī (1503 / 04 年没) 作『驚くべき者たちの技芸 (Ṣanā'ī' al-Badā'ī')』[SB] のみであるが、その内容の考察とシャフル・アーシューブ史における位置付けによって、当時の社会状況と文化水準を考える上で、重要な材料を提供することができる。そこで本稿では、まずシャフル・アーシューブなる文学ジャンルとその歴史を概観した後、上記サイフィーの作品の内容を考察し、その成果を踏まえて、ティムール朝ルネサンスなる表現の妥当性を探る材料とするため、ペルシア韻文学の隆盛と都市社会の成熟との関連について検討する⁵⁾。

I シャフル・アーシューブについて

1 シャフル・アーシューブとその起源

前近代イスラーム時代のペルシア韻文学における一ジャンル、シャフル・アーシューブについては、これまで、歴史研究はもちろん、文学研究の立場からも、ほとんど言及されることがなかった。シャフル・アーシューブに関するまとまった研究成果としては、Gulchīn-i Ma'ānī 1968 がほとんど唯一のものである⁶⁾。以下この研究成果を活用しながら、シャフル・アーシューブとその歴史を概観し、サイフィーの作品の重要性を確認したい。

シャフル・アーシューブはシャフル・アンギーズ (shahr-angīz) と呼ばれ⁷⁾、字義的には「美しさ (ḥusn va jamāl) において町を騒がす者 (āshūbanda-yi shahr) や世間に騒がれる者 (fitna-yi dahr)」を意味し、文学作品としての定義は「町の住人たちに対して詩人たちが行なう賞賛や非難」である。詩型に特に定まったものはないが、都市住民のうち、特に職人や商人を題材としたシャフル・アーシューブにはルバーイー（四行詩）が多く、特定の都市の住民や宮廷の人々に対する賞賛や非難の場合は、カスィーダ（頌詩）やマスナヴィー（長編詩）が多い。このほかキトア（断片詩）やガザル（叙情詩）の場合もある [Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 3-4]。

5) 筆者は既に、イラン研究者集会（1999年4月4日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、比較中世史料研究会（1999年7月10日、京大会館）、文部省科学研究費補助金特定領域研究「古典学の再構築」原典班研究集会（1999年11月13日、京大会館）において、本稿の内容に関連する口頭発表を行ない、各々の会で多くの貴重な意見をいただいた。ここに記して、主催者と出席者の方々に謝意を表する。

6) このほかには、パキスタン人研究者 (Sayyid 'Abdullāh) の研究成果の紹介を含む Maḥjūb 1967 があり、また Keyvani 1982 にサファヴィー朝末期のシャフル・アーシューブ作品の英訳が見られるが（筆者未見、近藤信彰氏のご教示による）、あとは校訂・出版されたシャフル・アーシューブ作品に付された序文が参考になる程度である。

7) ほかに、類似する語義を持つダフル・アーシューブ (dahr-āshūb)、ジャハーン・アーシューブ (jahān-āshūb)、アラム・アーシューブ ('ālam-āshūb)、ファラク・アーシューブ (falak-āshūb) などとも用いられることがある [Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 5; Hiravī 1987: 8]。

シャフル・アーシューブの起源については、17世紀オスマン朝下で編纂された文献目録の中にシャフル・アンギーズの項目があり、6人のトルコ詩人が列挙されていることから [KZ: II, 1067], トルコ起源とする見解 (ギブ E. J. W. Gibb による) がある [Browne 1924: 237]。しかし、「シャフル」、「アーシューブ」、「アンギーズ」という語は、いずれも中世ペルシア語に見られ、近世ペルシア語本来の語彙に含まれるから、この文学ジャンルがペルシア語文化圏で生まれたことは疑いない。最も古く完全なシャフル・アーシューブ作品と見なされるのは、ガズナ朝のラホール宮廷に仕えたマスウード・サアド・サルマーン Mas'ūd Sa'd Salmān (1047–1121) の諸作品 [DM: 562–79; do.: 636–53] や、同王朝下のホラーサーンで活躍したサナーイー・ガズナヴィー Sanā'ī Ghaznavī (c. 1180–1141) の作品 [KB] である [Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 4]。より古いと思われる前者の二作品が、現在のパキスタンのラホールにおいて詠まれたものであるため、この文学ジャンルの起源をインドのペルシア文学の中に求める見解がある [Mahjūb 1967: 685]。しかし、マスウード・サアド・サルマーンやサナーイー・ガズナヴィーの諸作品は、10～12世紀の近世ペルシア文学隆盛期の産物であり、その中心はホラーサーンと、やや遅れてアゼルバイジャンであるから [黒柳 1977: 50–51]、勃興期のインド・ペルシア文学に結び付けることはきわめて難しい。上述二人の詩人とほぼ同時代、12世紀セルジューク朝下に活躍したアゼルバイジャン出身の女流詩人マフサティイー・ガンジャヴィー Mahsati Ganjavi もシャフル・アーシューブを詠んでいるから [Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 15–17]、この文学ジャンルは、ガズナ朝やセルジューク朝の庇護下に円熟期を迎えた近世ペルシア文学の中から興った、と考えるべきであろう。

2 シャフル・アーシューブの分類

その後シャフル・アーシューブは、一時的にペルシア文学史上から姿を消すが、やがて復興し、19世紀末までこのジャンルに属する作品の存在を確認することができる。Gulchīn-i Ma'ānī 1968 は、先述の最初期の諸作品から19世紀末のものまで、作者を特定できる合計41のシャフル・アーシューブ作品を取り上げている。これに漏れた1作品を加え、合計42作品を、必要最小限の情報とともに、おおよその時代順に並べると、次ページの表1のような⁸⁾。

いまこれらの作品を逐一検討することはできないが、筆者の判断では、シャフル・アーシューブ作品は、題材と意図によって大きく二つのタイプに分けることができる。第一のタ

8) Gulchīn-i Ma'ānī 1968 に漏れていたのは、詩人伝中に言及・引用されている表1: No. 13 の作品である [TS: 274]。この表に含まれていないシャフル・アーシューブ作品には、作者と成立年代が不詳のもの1作品と、散文のシャフル・アーシューブ2作品があり、また表1: No. 25–26 の作者が、さらにもう一つの作品を編んだ可能性がある [Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 61, 92–95]。なお、表1: No. 14 の作者名を Khurramī Iṣfahānī とする史料もあるが [TS: 278]、これをテキスト校訂の際の誤りと判断し、Browne 1924: 237; Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 38 に従って Ḥarfi Iṣfahānī とした。

表1 シャフル・アーシューブ作品一覧

No	作 者 名	作品名および題材・都市名など	作品の形態
1	Mas'ūd Sa'd Salmān (1047 – 1121)	ラホール	キトア集
2	同 上	ガズナ朝 Sulṭān Shīrẓād の宮廷	マスナヴィー
3	Sanā'ī Ghaznavī (c. 1080 – 1141)	<i>Kārnāma-yi Balkh</i> ; ガズナ朝 Sulṭān Mas'ūd の宮廷	マスナヴィー
4	Mahsatī Ghanjavī (12 世紀)	アゼルバイジャンのガンジェ	ルバーイー集
5	Kamāl al-dīn Kūtāhpāy (12 世紀)	バダフシャンのキーヌース	カスィーダ
6	Amir Khusrav Dihlavī (1253 – 1325)	デリー	ルバーイー集
7	Sayfī Bukhārī (d. 1503 / 04)	<i>Ṣanā'ī' al-Badā'ī'</i> ; ヘラート	ガザル集
8	Āghā Khurāsānī (d. 1525 / 26)	1519 / 20 年完成; ヘラート	カスィーダ
9	Khvāndamīr (c. 1475 – c. 1535)	<i>Nāma-yi nāmī</i> 所収書簡各々の冒頭部; ヘラート	ルバーイー集 (未集成)
10	Lisānī Shīrāzī (d. 1534 / 35)	<i>Majma' al-Aṣnāf</i> ; タブリーズ	ルバーイー集
11	Vahīdī Tabrizī Qummī (d. 1535 / 36)	タブリーズ	マスナヴィー
12	Hayratī Tūnī (d. 1554)	カズヴィーン	カスィーダ
13	'Ishqī Darguzīnī (16 世紀半ば活躍)	タブリーズ	不 詳
14	Ḥarfī Ṣfahānī (d. 1563 / 64)	ギーラーン	不 詳
15	Muḥammad Qāsim Zārī Ṣfahānī (d. 1571 / 72)	イスファハーン	カスィーダ
16	Rashkī Hamadānī (d. 1583 / 84)	サファヴィー朝 Shāh Tahmāshb の宮廷とカズヴィーン住民	カスィーダ
17	Nikī Ṣfahānī (d. 1591 / 92)	ヤズド	カスィーダ
18	Hālātī Turkamān Tīhrānī (d. 1591 / 92)	カズヴィーン	ルバーイー集
19	Fayḍī Āgra'ī (d. 1595)	アグラ	ルバーイー集
20	'Ishqī Khvāfi (16 世紀末活躍)	No. 4 の作品の模倣; アグラ (?)	ルバーイー集
21	Dāvarī Arānī (17 世紀初頭活躍)	カーシャーン	カスィーダ
22	Faghfūr Lāhījī (d. 1619 / 20)	ゴルジェスターン (グルジア)	マスナヴィー
23	Shifā'ī Ṣfahānī (d. 1628)	イスファハーン	不 詳
24	Kalīm Hamadānī (d. 1650 / 51)	デカンのアクバラールバード	マスナヴィー
25	Avḥīdī Ḥusaynī Daqqāqī (d. 1632 / 33)	シーラーズ (?)	カスィーダ
26	同 上	同 上	カスィーダ
27	Nishāṭī Damāvandī (17 世紀半ば活躍)	イスファハーン	カスィーダ
28	Fayḍ Kāshānī (d. 1680 / 81)	<i>Dahr-āshūb</i>	カスィーダ集
29	Ṭāhīr Vahīdī Qazvīnī (d. 1698 / 99)	<i>'Ashiq va Ma'shūq</i> ; イスファハーン (?)	マスナヴィー
30	同 上	同名の異作品; イスファハーン	マスナヴィー
31	Ashraf Māzandarānī (d. 1704 / 05)	インドのフォーリー祭	マスナヴィー
32	'Aṭā'ī Tattavī (d. 1706 / 07)	スィンドのタッタ	カスィーダ
33	同 上	同 上	キトア
34	Yaktā'ī Lāhūrī (d. 1734 / 35)	<i>Jahān-āshūb</i> ; ムガル朝 'Ālamgīr の挽歌	マスナヴィー
35	Muḥammadbakhsh Āshūb Shāhjahānābādī (d. 1784 / 85)	<i>Falak-āshūb</i> ; イスラーム史・インド史	カスィーダ
36	Bīdīl 'Aẓīmābādī (1644 – 1721)	当時の政治・社会状況	ムハンマス
37	Sarḥaddī Qahfirukhī (d. 1831 / 32)	テヘラン (?)	不 詳
38	Furūgh Ṣfahānī (19 世紀半ば活躍)	<i>Tadhkirat al-Shabbāb</i> (1848 / 49 年完成) 冒頭部; タブリーズ	カスィーダ
39	Sāmī Hazārjarībī (19 世紀半ば活躍)	シーラーズ	カスィーダ
40	Shūrīdā'ī Shīrāzī (19 世紀半ば活躍)	1857 / 58 年完成; ファールス	カスィーダ
41	Naqīb Shīrāzī (d. c. 1883)	<i>Dah Bāb</i> ; 種々職業の慣習	マスナヴィー
42	Badr Lāhījī (19 世紀末活躍)	ラーヒジャーンのウラマー	カスィーダ

イブは、都市の一般住民層に属する職人や商人を主な題材とし、職種ごとに一編の詩があてられた短編詩集の形態を取っている。16世紀以前は、キトア集、ルバーイー集、ガザル集の形態をもつ場合が多く、17世紀以降はマスナヴィーが多い⁹⁾。この種のシャフル・アーシューブの場合、題材が社会的地位の低い職人や商人であるにもかかわらず、個々の職人・商人を、多くの人々から愛され町を騒がす佳人（つまりシャフル・アーシューブ）に見立て、その職種に関連する語句を用いて恋慕の情を歌っている [Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 5]。例えば表1-No.1のマスウード・サアド・サルマーンの作品では、金細工師 (zargar) について、以下のように詠んでいる [DM: 640]¹⁰⁾。

石の如き心を持つ月よ、心奪う太陽よ / 甘き唇を持つ佳人よ、金細工師の恋人よ
私は麗しき肢体の金細工師に会った / 私は自らの頬を金色に染めた
一度くらいは私の金色の頬を / 愛しき人よ、汝の銀色の頬に重ねてはくれぬか

このルバーイーは、内容は恋の歌であるが、対象は一介の職人であり、その職業に関連する語句（「金色」、「銀色」）が盛り込まれていることで、軽妙な味わいを醸し出している。このような詩を詠む目的はおそらく「娯楽・気晴し (tafannun)」であり [Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 6]、大衆文学を思わせる。この種のシャフル・アーシューブが生まれた背景には、舞台となっている都市の文化の発達、および社会の成熟があると考えられるべきであろう。

もう一つのタイプのシャフル・アーシューブ作品は、特定の都市の住民や宮廷の人々に対して繰り広げられた賞賛や非難であり、短編詩集ではなく、主にカスィーダであり、時にはマスナヴィーの形態を取る。宮廷詩人が自らの保護者とその周囲の人々を褒め賛えている場合もあれば、個人的な事情や政治的な意図により風刺や中傷を展開したものもある。例えば、上述サナーイー・ガズナヴィーのシャフル・アーシューブ作品 [表1: No.3] は、ガズナ朝のスルターン・マスウード Sulṭān Mas'ūd 宮廷に対する賛辞が中心となっているが、「財務官僚 (arbāb-i dīvān) と文官 (ahl-i qalam) について」は以下のような一節から始まっている [KB: 305]¹¹⁾。

9) マスナヴィー（長編詩）は長さが限定されず、フェルドウスィーの『シャー・ナーメ』のような長編の叙事詩・物語に適しているが、主題ごとの短編詩を集めた形にまとめることも可能である。マスナヴィーのシャフル・アーシューブ作品は、一編のマスナヴィーではあるが、短編詩集の形態を取っている場合が多い。

10) 以下、引用した韻文については、ラテン文字転写 (Thiesen 1982 に準拠) と韻律を注記する。
転写: mah-ē sangīn-deli ey mehr-e del-jūy/bot-ē šīrīn-labī ey yār-e zargar/be-dīdam
zargari šīrīn-nehādī/az ān kardam roḥān-ē h'īš cūn zar/magar rūzī roḥān-ē cūn zar-ē
man/nehī jānā be-simīn 'āreḍ-at bar; 韻律はハザジェ・モサッダセ・マフズーフ体 (U—
—/U— —/U—) である [Thiesen 1982: § 194; Shamisā 1996: 190]。

11) 転写: rūḥ-rā dāye jāy-e īšān-ast/'aql-rā māye rāy-e īšān-ast/'arše-yē mūheš ast ḥeyrat-
ešān/qāṣeḍ-ē masra'-ast fekrat-ešān/moškel-ē geyb ḥal konand be-kelk/āsmān-rā badal
konand be-kelk; 韻律はハフィーフェ・アスラム体 (—U—/U—U—/UU—) である
[Thiesen 1982: § 230; Shamisā 1996: 47]。

彼らの地位は魂にとっての乳母であり / 彼らの見解は理性にとっての資産である
 彼らの当惑は恐ろしい戦場であり / 彼らの思考は疾駆する使者である
 彼らは隠された難問を筆で解決し / 天 [=運命; 王権の所在] を筆で代える

一方、12世紀の詩人カマルッディーン・クーターフパーイの作品 [表1: No.5] には、
 以下のような一節がある [Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 19]¹²⁾。

彼らのターバンは縄のようで、シャツは頭髪でできている
 彼らのズボンは経帷子のようで、ベルトもなしに尻のところで結んでいる
 [彼らは] 綱を断ち切ったロバのよう、土埃を上げている牛のよう
 各々が吊され 50 ラトルの糞をたらしている雌羊のよう
 [彼らの] 頭の中は女の裸で一杯で、女たちの腹は空っぽ
 かくて、かの売春婦たちは、傲慢さゆえ王にさえ居場所を与えない

ここで言う「彼ら」とは、クーターフパーイが徴税長官として赴任したバダフシャンのキーヌースの人々を指している。その描写にはキーヌースの人々に対する嫌悪感がにじみ出ており、風刺・中傷というより侮辱に近い。同様な例では、ヘラートの詩人が自身の処遇に対する不満から「ヘラートのすべてのハーキム、アミール、サイイド、ウラマー、有力者 (ashraf va a'yān) を誹謗 (madhammat) するため」に詠んだシャフル・アーシューブ作品 [表1: No.8] や、イスファハーン出身の詩人がギーラーンに赴き「その地とその地の人々を誹謗するため」に詠んだ作品 [表1: No. 14] があるが、前者の場合は、後に懲罰として作者の舌が切り取られたという [HS: 360; TS: 208, 278]。

ペルシア詩人は、アラブ詩人と同様、揶揄・風刺、あるいは誹謗・中傷を目的として創作活動を行なうことが少なくなかったから [Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 6]、上記のような例は特に驚くに値しない。注意すべきことは、この種のシャフル・アーシューブ作品の場合、第一のタイプと比べて、都市文化の発達や都市社会の成熟との関連性が弱いということであろう。文学作品としての特徴は、賞賛を目的とする場合はやや仰々しくなるが、風刺や中傷の場合には、第一のタイプと同じく、軽妙さが感じられるということである。なお、シャフル・アーシューブ作品としては、第一のタイプが主流であり、数も多い。

3 シャフル・アーシューブ史上の断絶とサイフィーの作品の重要性

先にも述べたが、表1から判るように、シャフル・アーシューブ作品は、12世紀から19

12) 転写: dastār-hā-sān cūn rasan az mūy-e sar-sān pīrahan/šālvār-hā-sān cūn kafan bī-band bastē bar kafal/cūn ḥar rasan be-gosīhtē (bogsīhtē) cūn gāv gard angīhtē/har yek čō mīš āvihtē peškel ze-kūn panjāh raṭl/bar sar ze 'oryānī zan-ān ḥālī šekam-hā-sān zan-ān/v-āngah ze kebr ān ḡar-zan-ān na-nehand (nanhand) sulṭān-rā maḥal; 韻律はラジャゼ・モサッダセ・サーレム体 (—U—/—U—/—U—/—U—) である [Thiesen 1982: § 215; Shamīsā 1996: 57]。

世紀末まで存在を確認することができる。しかし、11世紀末から12世紀に編まれた初期の5作品〔表1: No.1-5〕と、本稿で考察する15世紀末のサイフィーの作品〔表1: No.7〕との間に、1作品しか確認できず〔表1: No.6〕、しかも、その作品はインドで編まれたものである¹³⁾。このような、シャフル・アーシューブ史上に見られる断絶は、この文学ジャンルが、ペルシア語文化圏において一度は廃れたことを意味すると考えられる。

そもそもシャフル・アーシューブあるいはシャフル・アンギーズというジャンル名の成立が問題であり、10-12世紀の近世ペルシア文学隆盛期の文献では、このジャンル名を確認することはできない。管見の限り、この名称がはじめて文献に記されたのは、1524年に完成した歴史書 $\dot{H}S^{14)}$ であり、15世紀末から16世紀初めにヘラートで活躍したアーガヒー・ホラーサーニーが「AH 926 (1519/20) 年」に「シャフル・アーシューブを編んだ」という記述が見られる〔 $\dot{H}S$: 360; 表1: No.8〕。この歴史書には、アーガヒーの作品より先に成立したサイフィーの作品〔表1: No.7〕に関する言及があるが、シャフル・アーシューブとは呼んでいない〔 $\dot{H}S$: 346〕。やや時代が下って16世紀半ばに記された詩人伝になると、「ヘラートの住人たちのためにシャフル・アーシューブを詠んだ」、「タブリーズのためにシャフル・アンギーズを詠んだ」、「タブリーズの町のためにシャフル・アンギーズを詠んだ」、「その地 [=ギーラーン] とその地の人々を誹謗するためにシャフル・アーシューブを詠んだ」といった記述が見られる〔 TS : 208, 227-28, 274, 278; 表1: No.8, 11, 13〕。また、本章で既に言及したとおり、17世紀オスマン朝下に編まれた文献目録 KZ にはシャフル・アンギーズという項目が見られる。

以上のことから、シャフル・アーシューブまたはシャフル・アンギーズというジャンル名は16世紀前半に定着したと考えられる。そうすると、本稿で取り上げるサイフィーの作品が成立した時期（15世紀末）は、ジャンル名が定着する直前にあたる。また、この作品の登場によってシャフル・アーシューブ史上の断絶が終りを告げているのである。

サイフィーのこの種の創作活動については、彼の保護者であったミール・アリーシール（ナヴァーイー）が〔久保1990: 表II, No. 35〕、以下のように述べている。

職人たち ($\dot{s}an'at\ va\ \dot{h}irfa\ ahl-i$) のためにも非常に優美な詩を詠んだ。その道における創始者 ($mukhtari$) である。〔 MN : 86〕

13) 表1: No.6の作品については、高名なインドのペルシア詩人アミール・ホスロウ・デフラヴィーによるものではなく、ムガル朝のアクバル時代(1556-1605)あるいはジャハーンギール時代(1605-27)に編まれたものではないか、との疑念が提示されており〔 $\dot{M}ahj\ddot{u}b$ 1967: 693-94〕、確かに EI^2 (P. Hardy, $\dot{A}M\ddot{I}R\ KHUSRAW$) にもアミール・ホスロウのシャフル・アーシューブ作品への言及はない。ゴルチーネ・マアーニーは、この作品を、1918年頃ハイデラーバードで出版された石版本のアミール・ホスロウ著作集と、写本のアミール・ホスロウ詩集に基づいて紹介している〔 $\dot{G}ulch\ddot{i}n-i\ Ma'āni$ 1968: 21〕。

14) $\dot{H}S$ は1524年1月ヘラートで一旦完成し、1529年4/5月インドで補訂されたが、ここで言及している箇所は補訂部分に含まれておらず、遅くとも1523年9/10月までには記されている〔 $\dot{M}iklukho-Maklay$ 1963; 久保1997a: 55-56〕。

この部分の解釈について、ゴルチーネ・マアーニーは詩型の問題を重視し、サイフィーが、ガザル集の形態をしたシャフル・アーシューブ作品の「創始者である」という意味に解した [Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 4]。しかし、アリーシールが、サイフィーを、この文学ジャンル自体の創始者と誤解していた可能性も十分にある。それは、サイフィーの作品が登場するまで、久しくシャフル・アーシューブ作品が編まれず、また先行諸作品のうち、時代的にサイフィーの作品に最も近いアミール・ホスロウの作品が [表 1: No.6]、知名度の低いもの、もしくは存在が疑わしいものと考えられるからである [本稿注 12]。

サイフィーの作品の登場後は、それ以前の空白期が嘘であるかのように、主にサファヴィー朝下で続々とシャフル・アーシューブ作品が誕生している。シャフル・アーシューブ史上に見られる断絶は、ペルシア韻文学におけるこのジャンルの衰退を意味するが、サイフィーの作品の登場を契機に復興し、ジャンル名が定着するのみならず、数多くの作品が生み出されることになったのである。都市住民を題材としたシャフル・アーシューブ作品の復興と流行については、本稿の主な関心となっている、都市文化の発達や都市社会の成熟が、その要因であると考えられる。いまこの問題を別にしても、本稿で取り上げるサイフィーの作品が、その存在自体、ペルシア韻文学史上に重要な意義をもつことは確かである。

II サイフィーのシャフル・アーシューブ作品

1 作者サイフィー・ブハーリーについて

15 世紀末ヘラートのシャフル・アーシューブ \$B\$ の作者サイフィー・ブハーリーはその名の通りブハーラーの出身であるが、1487 年までにヘラートに赴いて就学を開始し [TSh: 85]、詩才ゆえ当代随一の学芸保護者ミール・アリーシールの保護を受け、かつ君主スルターン・フサインの宮廷にも出入りした [ĤS: 346; MN: 86]。また神秘主義思想家・ペルシア詩人として高名なアブドゥッラフマーン・ジャーミーと交流があったという [Gulchīn-i Ma'ānī 1968: 26]。その後マーワランナフルへと戻り、主にサマルカンドに滞在してスルターン・フサインとは別系統のティムール朝王子バイスンクル・ミールザー Bāysunqur Mirzā (在位 1495–96, 1497) に 2～3 年仕えたが、1499 年この王子が殺害されると、故郷ブハーラーに戻り、1503/04 年に没した [ĤS: 346; KhA: 230]。

保護者であったアリーシールは、サイフィーについて以下のように述べている。

ウラマーとしての聡明さ (mavlānā-hushyār-ligh) を備えながら、非常に人間的で (basī ādamī-vash) 恥じらいや礼儀を心得ている若者である。しかし、酔ったときに (sarkhvush-luq-da) 本性を表わしたり、恥をかくこともあるようだ。最近改悛に成功した。忍耐をも身に付けることを望んでいる。[MN: 87]

また同じく同時代人の、ティムール朝の王子でムガル朝の創始者ムハンマド・バーブル・ミールザー Zāhīr al-dīn Muḥammad Bābur Mirzā (1483–1530) は、サイフィーについ

て以下のように評している。

ムッラー [=ウラマー] としての学識を備えていた (mullā-ḥigh-ī bar edī)。読んだ本の一覧を人々に示して、いかにムッラーとしての学識があるかを誇示していた。…… [中略] ……ワインをいぎたなく飲み、ワインの酒癖は良くなかったようである。腕力が強かったらしい。[BN: 280-81; BN/J: 284]

酒癖の悪さで顰蹙を買いながらも、ウラマーとしての学識を備え、自らもそれを自負していたようである。韻文学の素養も確かなものであったらしく、韻律学 ('arūḍ) とムアンマー (韻文の謎謎) 各々に関しリサーラ (論説) を著している [BN: 281; BN/J: 284; MN: 87]。当時流行したムアンマーは、特に当代随一の学芸保護者アリーシールに愛好されていたから [久保 1990: 47-48]、若き日の BV の著者マフムード・ワースィフィー Zayn al-dīn Maḥmūd Vāṣifī (c. 1485-16 世紀半ば) は、1500 年頃ヘラートのバーザールにおいてサイフィーのムアンマーに関するリサーラを発見し、大喜びしたという [BV: 485-86]。

サイフィーは、宮廷への出入りが許され、アリーシールやジャーミーと交際していたのであるから、当時のサロン文化の影響を強く受けていたと思われる。アリーシールと、同じく宮廷の実力者で学芸保護者ホージャ・マジュドゥッディーン・ムハンマド Khvāja Majd al-dīn Muḥammad [久保 1997 b: 161-64] が、ヘラートにおいて合同で開催した交歓会 [久保 1990: 注 44] にも出席している [BV: 526]。しかし、サイフィーは、自らの創作活動について、以下のように考えていた。

マスナヴィーが詩の伝統 (sunnat) であるが / 私はガザルを個人的義務 (farḍ-i 'ayn) と考える
心楽しませるガザルの 5 バイトは / 両種の『ハムサ』にも勝ると考える [BN: 281; BN/J: 284]¹⁵⁾

詩人としては、伝統重視の正統派志向ではなく、くだけた感覚を備えていたと考えられる。それゆえ自らの詩の題材に職人や商人を選んだのであろう。

2 作品の概要と題材について

サイフィーのシャフル・アーシューブ作品について、同時代人たちは「職人たち (arbāb-i ṣanā'āt) について、別にもう一つの詩集 (dīvān) を作り上げ、その詩の中に格言や斬新な言葉をちりばめた」[HS: 346]、あるいは「あらゆる職人 (ḥirfagar-lar) のために書いた一巻の詩集もあった」[BN: 281; BN/J: 284] と述べている。この「詩集」が編まれた時期は確定されていないが、その存在に言及しているのは、サイフィー死後に著わされた文献のみである。1491/92 年完成 (1498/99 年増補) の詩人伝では、サイフィーが「職人たちのためにも非常に優美な詩を詠んだ」と言うだけで詩集には言及しておらず [MN: 86]、1499 年に完成された歴史書においても「彼 [=サイフィー] には職人たち (ahl-i ḥirfa)

15) 転写: maṭnavī garče sonnāt-ē še'r ast/man ḡazal farḍ-e 'eyn mīdānam/panj beyti ke del-paḍīr bovad/behtar az ḥamsateyn mīdānam; 韻律はハフィーフェ・アスラム体 (-U-U-U-U-U-U-) である [Thiesen 1982: § 230; Shamsī 1996: 47]。

に関する不思議な詩が多い」と記すのみで、詩集についてはふれていない [KhA: 230]。

この作品は、サイフィーがヘラートを離れて郷里のマーワランナフルに戻った後、おそらく保護者バイスクル・ミールザー存命中の 1499 年までに、詩集の形に編まれた可能性が高い。しかし、個々の詩が詠まれたのはサイフィーのヘラート滞在中のことと考えて間違いなく、スルターン・フサインを賞賛する詩が含まれている [SB: 20]¹⁶⁾。また「マーヒーチェのガザル」と題された詩 [表 2: No. 78] の最終バイトは、次のようなものである¹⁷⁾。

私サイフィーは、サマルカンド出身の佳人 (māh) がつくるマーヒーチェを食べても

我が人生の望みに合うのは、ホラーサーンの苦いボグラである [SB: 51]

ここに見られる「マーヒーチェ」も「ボグラ」も料理の種類である。この一節には、マーワランナフルへの郷愁を認めつつも、ホラーサーンに、離れ難い魅力を感じているサイフィーの心情が表わされている。

この作品の題名『驚くべき者たちの技芸』は、末尾に付されたルバーイーの中で明言されており [SB: 75]、作品中には「職人のガザル集 (ghazalhā-yi kāsibāna)」と表現した箇所がある [SB: 68]。個々のガザルを「リサーラ」と呼んでいる箇所があるが [SB: 35]、これは、各ガザルを特定の職業・専門（あるいは題名にある「技芸 (ṣanāʿi; ṣanʿat)」）に関するリサーラと見なしていることを意味する¹⁸⁾。末尾のルバーイーを除くと、詩型はみなガザルであり、互いに独立した関係になっている。前章で述べた分類で言うと、第一のタイプのシャフル・アーシューブ作品であるといえる。作品全体で合計 124 のガザルが収められており、各々に「～のガザル (ghazal-i ~)」という表題が付されている。この表題によって表わされた、各ガザルの題材を列举すると、次ページの表 2 のようになる（なお、番号は校訂テキストに付された通し番号である）。

16) この詩は「シャー・フサインのガザル」と題されており [表 2: No. 16]、以下のような内容である：町中のすべてが騒ぐかの佳人 / 世の美しき者たちを騒がせるのはシャー・フサイン / そのかんばせの美しさで月や太陽が輝いている / 月や太陽も羨む二つの美しい頬をもつ / おお佳人よ、汝の黒馬が踏み下ろす蹄鉄さえ / 我が眼に宿る瞳にははっきりと映る …… [以下省略] …… [久保 2001: 45]。題材とされている人物は存命中で、「汝の黒馬が踏み下ろす蹄鉄」という表現から騎乗の人物と考えられ、また普通シャフル・アーシューブでも他の文学作品と同様に、時の為政者への賛辞を盛り込むから、「シャー・フサイン」は君主スルターン・フサインのことと考えて間違いなからう。カルバラーの悲劇で殉教したシーア派第 3 代イマームのフサインを指し、その殉教劇を題材としている、と考えることも不可能ではないが、根拠に欠ける。なお、このガザルをはじめ、SB 所収ガザルのうち、20 編の翻訳・転写および韻律を、久保 2001 に示してある。

17) 転写: ḥo Sayfī gar ḥʾorām māhiḥe-yē mäh-ē samarqandi/be-kām-ē ʾeyš āyad talḥ boḡrā-yē Ḥorāsān-am; 韻律はハザジェ・モサンマネ・サーレム体 (U— / U— / U— / U—) である [Thiesen 1982: § 191; Shamīsā 1996: 153]。

18) 当該箇所は「おお佳人たちよ、サイフィーの書はみな汝らについて述べている / このような [佳人の] ことに関するリサーラを集めた小著 (nāmaḥa) である」というバイトである [久保 2001: 43]。リサーラは、ふつうは特定の主題・学問分野の論説文であるが、そのほか主に手工業の特定の業種の規約や儀礼を記したものもある [Mukminova 1976: 25–29; 小松 1991: 292–93]。サイフィーは後者を念頭において、各ガザルをリサーラと表現しているのである。

表2 ŞB 所収ガザルの題材一覧

1. 土壁職人 (gilkār)	43. カッレ料理人 (kallapaz)	85. 手綱曳き (chilāvdār)
2. 歯痛 (dard-i dandān-i ‘āshiq)	44. バラ水職人 (gulābi)	86. 賭博師 (qumārbāz)
3. 大工 (durūdgar)	45. 隊商宿職員 (kārvānsarāyi)	87. 臘燭職人 (shammā’)
4. 人夫 (zūrgar)	46. アミール (imāratma’ab)	88. タイル職人 (kāshītārāsh)
5. 香薬商人 (‘aṭṭār)	47. 射手 (tirandāz)	89. 帆布商人 (karbāsfurūsh)
6. サールー商人 (sālūfurūsh)	48. 風呂屋 (ḥammāmī)	90. 炭商人 (angishtfurūsh)
7. ナルド師 (narrād)	49. 装丁職人 (mujallid)	91. 眼医者 (kaḥḥāl)
8. チェス師 (shaṭranjbāz)	50. 弓職人 (kamāngar)	92. 歌い手 (naqshgū)
9. 衣料職人 (jāmabāf)	51. 物乞い (kungur)	93. 矢職人 (tīrgar)
10. フーテ商人 (fūṭafurūsh)	52. 神に魅せられた者 (muwallih)	94. 宝石細工師 (zargar)
11. スーフィーの佳人 (nigār-i ṣūfi)	53. 鳩匠 (kabūtārbāz)	95. 両替商 (ṣarrāf)
12. ハルワー職人 (ḥalvāgar)	54. 三兄弟 (sa barādar)	96. 釘職人 (mikhchagar)
13. フッカー屋 (fuqqā’i)	55. 帽子職人 (ṭāqiyadūz)	97. 絹商人 (abrishamfurūsh)
14. 鍛冶屋 (āhangar)	56. 物語り師 (qişşakhvān)	98. サフラン商人 (za’farānfurūsh)
15. ‘Abdullāh	57. シャツ商人 (pirāhanfurūsh)	99. ラッパ吹き (nafirchī)
16. Shāh Ḥusayn	58. 黒土職人 (tirakhākī)	100. シロップ屋 (sharbatdār)
17. サドルの若者 (pisar-i ṣadr)	59. 鷹匠 (qūshchī)	101. 農民 (dihqān)
18. Shaykh Ṣafā の息子	60. 水売り (ābdār)	102. 理髪師 (mūyṭāb)
19. Bābā Dūst	61. プーラーニー料理人 (pūlānīpaz)	103. ダルヴィーシュ
20. 鹿舎長 (mīrākhur)	62. ハリーセ料理人 (harīsapaz)	104. 門番 (darvāzabān)
21. 長靴商人 (mūzafurūsh)	63. 力士 (kushtigīr)	105. 守衛 (darbān)
22. イマームザーデ	64. 夜警 (‘asas)	106. 矢筒職人 (tarkashdūz)
23. 染料商人 (rangīnfurūsh)	65. 薄髭を生やす者 (navrīshāna)	107. 箭筒士 (qūrchī)
24. 天幕職人 (khaymadūz)	66. 難聴 (girānī-yi gūsh)	108. 針職人 (sūzangar)
25. やすり職人 (sūhāngar)	67. ござ職人 (būriyāyi)	109. 扇勤者 (shūri)
26. 飼料屋 (‘allāf)	68. 塩商人 (namakfurūsh)	110. チャング奏者 (changī)
27. 運搬人 (ḥammāl)	69. 靴職人 (kafshdūz)	111. 煉瓦職人 (khishtmāl)
28. パン焼職人 (tanūrgar)	70. 財務役人の若者 (pisar-i diwān)	112. 演奏家 (sāzanda)
29. 鼓手 (naqqārachī)	71. Ḥasan ‘Alī	113. 奴隸 (ḥalqa ba-gūsh)
30. 絹布職人 (vālābāf)	72. コーラン読唱者 (muqrī)	114. 犬飼い (sagbān)
31. 表地職人 (baradūz)	73. 服地屋 (bazzāz)	115. 狂人の若者 (pisar-i divāna)
32. 財庫管理人 (khizānachī)	74. 慈善建造物の下僕 (farrāsh)	116. 殺人の讒言 (tuhmat-i qatl)
33. バーザール商人 (bāzargān)	75. 棍棒士 (chunbachī)	117. シャイフの子孫 (shaykhzāda)
34. 聖者 (abdāl)	76. 鋳物職人 (rikhtagar)	118. ボロ競技者 (chavgānbāz)
35. ヒヤーバーンの人 (khiyābānī)	77. 計量人 (tarāzūdār)	119. 断食 (rūza dāshtan)
36. 菓子職人 (qannād)	78. マーヒーチェ [料理人]	120. 仕立て屋 (darzī)
37. 囚人 (zindānī)	79. 肉屋 (qaşşāb)	121. 委任管理者 (amīn)
38. 染色職人 (rangriz)	80. 屠殺人 (sallākh)	122. 朗唱家 (khānanda)
39. 能書家 (khaṭṭāt)	81. 酌人 (sūchī)	123. バラバーン奏者 (balabānī)
40. 魚料理人 (māhīpaz)	82. ラクダ曳き (sārbān)	124. 酢職人 (sirkāyi)
41. パン職人 (nānvā)	83. 歩兵 (piyādarav)	
42. カバーブ料理人 (kabābī)	84. 使者 (payk)	

表2から判断すると、この作品に収められたガザルの題材には、職人や商人を中心に、芸術家、軍人、官僚など実に多様な職種が含まれ、さらに宗教者、遊興者、特定の人物、はては宗教上の行事や施設にまで及んでいる。同時代史料が言うところの「職人 (ahl-i ħirfa; ħirfagar; ahl-i ṣan'at; arbāb-i ṣan'at)」とは、手工業者のみを指すのではなく、商人、官吏、芸術家などを含み、特定の職業や専門分野を持つ者を指していることが判る。この作品の題名にあるように、何らかの「技芸 (ṣan'at)」に習熟した者であると言える。サイフィーは「技芸」を実に幅広く解釈しており、苦行としての断食 [表2: No. 119]、さらには難聴 [表2: No. 66] や発狂 [表2: No. 115] をも題材としている。また、庶民の願かけの対象、イマームザーデ（シーア派イマームの子孫の墓）を題材としたガザル [表2: No. 22] において、以下のように述べている [SB: 23; 久保 2001: 46]。

ひれ伏すばかりの業を為すイマームザーデは

32の集団にいない妖精の顔をしている

…………… [中 略] ……………

サイフィーは詩作の技術 (fan-i shi'r) をかくも優美なものとした

この技芸 [= 詩作] において良き者たちの技芸 (ṣan'at-i khūbān) 以外はないように「ひれ伏すばかりの業」とは、願かけの内容が現実のものとなる奇跡を指している。つまり、サイフィーはイマームザーデがおこす奇跡をも「良き者たちの技芸」の一つに数えているのである。

いま題材の性質に従って合計124のガザルを分類すると、① 職人や商人を題材とするもの65編 (No. 1, 3-6, 9-10, 12-14, 21, 23-28, 30-31, 33, 36, 38, 40-44, 48-50, 55, 57-58, 60-62, 67-69, 73, 76-80, 82, 85, 87-91, 93-98, 100, 102, 106, 108, 111, 120, 124), ② 政府・宮廷の官職保有者および機関・組織の職員を題材とするもの22編 (No. 17, 20, 29, 32, 45-47, 53, 59, 64, 70, 74-75, 81, 83-84, 99, 104-105, 107, 114, 117), ③ 遊興者・芸術家を題材とするもの12編 (No. 7-8, 39, 56, 63, 86, 92, 110, 112, 118, 122-123), ④ 特定の人物を題材とするもの6編 (No. 15-16, 18-19, 54, 71), ⑤ 宗教者を題材とするもの5編 (No. 11, 34, 52, 72, 103), ⑥ その他の住民や人物以外を題材とするもの14編 (No. 2, 22, 35, 37, 51, 65-66, 101, 109, 113, 115-116, 119, 121) となる¹⁹⁾。職人・商人を題材とするものが過半数ではあるが、そのほかにも都市文化の繁栄と密接な関係をもつ題材が数多く見られる。

3 職人や商人についてのガザル

各々のガザルは、例外なく、題材となっている職人・商人等を「マアシューク ma'shūq (強い恋愛感情を抱かれる佳人)」に見立て、「アーシク 'āshiq (佳人に対して強い恋愛感情

19) 本稿の表2とは異なる、この分類に従ったSB所収ガザルの題材のリストを、久保 2001: 39 に示してある。

を抱く者)」が、振り向いてくれないマアシュークへの恋慕の情を歌うという、ペルシア古典文学に伝統的なスタイルを取っている。シャフル・アーシューブの場合は、前章で述べたように、語彙面に特徴があり、この作品の場合も、マアシュークの職業や専門分野に関連する語句が盛り込まれている。マアシュークに思いを寄せるアーシクは不特定多数であるが、ガザルでは、必ず最終バイトに作者の筆名が詠み込まれる規則になっており、形の上で作者サイフィーがアーシクを代表している。

例えば、職人や商人を題材としたガザルのうち、「宝石細工師」²⁰⁾ [表 2 : No. 94] については、以下のように歌っている [SB: 59; 久保 2001: 40–41]。

宝石細工師の佳人 (but) は私を魅惑するデザインを考案し
 たえず媚態で私に偽りの戦い (jang-i zargari) を仕掛けている
 彼のルビーの指輪は魔物と妖精を屈服させた
 もしその指輪が私のもとにあれば、私はソロモンのように振る舞う
 もし一片の石からなるその無比の真珠が私の心を楽しませるとしても
 ルビーや宝石を賜わるより、私には宝石細工師 (jawhari) の方が良い
 妖精の顔を見た者は気が変になる
 かの妖精は私を発狂させておいて私に顔を見せない
 サイフィーはいかに彼と本意 (vaşl) を遂げられるのか、そういう運命を願うばかり
 彼のカットナイフ (tigh) に、私に対するその場限りのお情けがあらんことを

ここでは宝石細工師をマアシュークに見立てて「佳人」と呼び、「デザイン」「ルビー」「指輪」「真珠」など職業に関連する語を盛り込み、性行為をもほのめかしながら、満たされぬ思いを詩に詠んでいる。4行目の「もしその指輪が私のもとにあれば、私はソロモンのように振る舞う (sulaymāni kunam)」とあるのは、古代ユダヤの王ソロモンが神通力の備わった指輪を持っていたという逸話を踏まえている。

職人や商人について、いま一つの例を挙げれば、「魚料理人」[表 2 : No. 40] を題材とするガザルは、以下のようなものである [SB: 32; 久保 2001: 40]。

その包丁 (tigh) で私の魂を切り裂く魚料理人の佳人は
 私の胸を捌いて鍋 (tāba) の上で私を焼く
 私の骨は塩水で白くなるだろう
 塩水に溺れた私の身体をいつまで焼くのか
 私には身体全体に熱が残っているだけで十分だ
 まるで魚のように私を鱗 (diram) の中に素早く隠す

20) 原語 zargar は字義通りには「金細工師」であるが、この作品の内容から「宝石細工師」と訳するのが適当と考えた。一方、先に第 I 章で DM から引用したルバーイーの題材「金細工師」の場合も原語は zargar であるが [本稿 60 頁]、こちらは内容から判断して、金・銀製品の細工にのみ携わっていた可能性が高い。

契り (vaşl) の澄んだ水がなければ、私は魚のように喉の渇きで死ぬ
 あの佳人はいつまで私の心からの願いを遠ざけるのか
 かくて私サイフィーは日夜契り (vişâl) の機会を求め
 その機会を求めることで身の破滅を招くのを恐れている

やはりこのガザルも、マアシュークである魚料理人に恋焦がれる気持ちを歌っており、性行為をほのめかしている。語彙面に注意すると、当時の魚の調理法が、魚の切り身を鍋の上で焼き塩水で味をつけるというものであったことが判る。ŞBに見られる個々の職業に関する情報は、今後歴史研究の立場から、改めて注目されることになるであろう。

上に二つのガザルを紹介したが、いずれも決して真剣な恋の歌ではなく、軽妙で洒落た味わいが感じられる。このような韻文作品は、幅広い層の娯楽・気晴しを目的としており、大衆文学の趣きがある。その他のガザルにも軽妙で洒落た味わいが感じられるが、そもそも題材の選び方がくだけており、「ナルド師」[表2: No.7], 「チェス師」[表2: No.8], さらに「賭博師」[表2: No.86] といった遊興の徒や、宴席の彩りとなる「朗唱家」[表2: No.112], 「演奏家」[表2: No.122] など題材に加えられている。このように題材が広く都市社会に求められているから、この詩集全体としては、ヘラートの都市文化の繁栄を、親しみ易い形で謳歌した作品という印象を与えている。

4 トルコ系アミールや高級官僚についてのガザル

このようなシャフル・アーシューブ作品の場合、都市生活を支える職人や商人を主な題材とし、彼らに対する恋心を歌うというスタイルに、都市の一般住民層の社会的地位の向上、および都市社会の成熟が反映されている、とすることができる。しかし、表2から判る通り、社会的地位の高い人物や高級官僚を題材としたガザルも存在する。君主や王族についてのガザルは賛辞が連ねられているが²¹⁾、その他の有力者や高級官僚については、趣きが異なっている。例えば軍人として最も地位の高い「アミール (軍隊長)」[久保 1997 b: 151-52] のガザル [表2: No.46] は以下のようなものである [ŞB: 35; 久保 2001: 43]。

もし [彼の] 慈悲なき心が私を殺そうとしないのなら
 彼は何のためにいつも腰帯に剣を吊しているのか
 彼の恩恵は普きものであり、彼の性質は良く、彼の美は完璧である
 立派なものだ、何と良い姿と品性を備えているのか

21) 注16で紹介した「シャー・フサインのガザル」が君主を題材としているほか、「三兄弟のガザル」[表2: No.54] も王族を題材としたものと考えられ、以下のような内容である：世界中でその素晴らしさが知れわたっている三兄弟 / みな美しさと清らかさで互いに優るとも劣らない / 背筋が伸びて見栄えのする名騎士たちが進んでいる / 妖精の顔をもち金の帯をしめた王冠の持主たちには / みな甘き言葉、快活な唇、魅力的な笑みが備わっている …… [以下省略] …… [ŞB: 39; 久保 2001: 45-46]。

彼の媚態は義務 (farq), 冷酷さは義務に準ずるもの (vājib) で, 殺生は許される (mubāḥ)

この種の問題を扱うのが美の学問である

目つきは大胆で睫は矢のよう, 眉毛は弓のようで心は酔い心地

みな〔彼に〕恋する者たち (‘ushshāq) を殺害する根拠 (dalāyil) である

…………… [最終バイトは本稿注 18 参照] ……………

この場合もやはり題材のアミールがマアシュークとされており, 職業に関連する語句として「剣」, 「矢」, 「弓」のほか, 「殺す」や「殺害」という物騒な表現も用いられている。もちろんこれは, 恋愛感情の激しさを強調するための表現である。これ以上に注目すべきことは, 5 行目でイスラーム法学上の術語が用いられているということである。「媚態は義務」とあるのは洒落た表現とも言えるが, 「冷酷さは義務に準ずるもの」, 「殺生は許される」というのは, 「根拠」(8 行目) があれば殺人を正当化できるトルコ系アミールへのあてこすりと解釈すべきであろう。当時の社会は, 部族的・氏族的紐帯によって統合される主にトルコ系の軍事集団と, 主にイラン系 (タジク系) のムスリム定住民に, それぞれヤサとシャリーアが適用されるという, 二元的法体系になっていたと考えて良い [久保 1997 b: 159 (図 2)]²²⁾。アミールへの恋心を歌うスタイルを取りながら, 実は, シャリーアを疎かにするトルコ系軍人を軽妙に揶揄しているのである。イスラーム諸学を学びつつヘラートのサロン文化の洗礼を受けたサイフィーの感覚は, おそらく, ほかの多くのイラン系文人やムスリム知識人と大きくは隔たっていなかったであろう。

ところが, 主にイラン系ムスリム知識人が任じられる高級官僚についても, 批判的なニュアンスを含むガザルを詠んでいる。例えば, サドルは, サイドやウラマーの宮廷への出入りを取り仕切り, 彼らに対する官職任免に関与する一方, 当時の社会にとって重要なワクフ運営状況を管理するという, 政府・宮廷の要職であった [久保 1997 b: 155-57]。このサドルについては, 「サドルの若者のガザル」[表 2: No. 17] が収められており, 次のような一節がある [SB: 21; 久保 2001: 42-43]。

サドルの若者は美しく我が魂は彼〔への思慕〕の悲しみのワクフ〔財産〕である

貧しき私に恩情をかけてくれるなら, 彼は寛容な人である

…………… [中 略] ……………

私には罪がないのに, 彼は私の命を奪うよう証書 (parvāna) を書いた

これは正に彼の圧制 (zulm) の跡であり, 不正 (sitam) の印である

22) ヤサは「チンギス・カンのヤサ」と呼ばれ, チンギス・カン時代の遊牧モンゴルの慣習法であるが, その後も変更を加えられながら, トルコ・モンゴル系軍事集団の中で重視されていた。このヤサに基づく司法を担当したのがヤルグチ (yārghūchi) であり, ティムール朝下でも確認できるが, ジャライル朝下では, ヤルグチの長でヤサ司法長官と呼び得る, ヤルグ・アミールという官職が存在した [DK: 29-35]。一方, シャリーアに基づく司法を担当したのは, カーディーおよびシャイフルイスラームである [久保 1997b: 157]。

「ワクフ」, 「恩情をかける (luṭf kardan)」, 「証書」以外に, 「圧制」と「不正」も, サドルの職務に関連する語句として詠み込まれている。マアシュークのつれなさを喩えた表現であるとはいえ, サドル職に不正や圧制がつきものであったことを示している。

サドルと同じく, 主にイラン系の専門的知識を有する者が任じられた財務官僚についても, 同様なことが言える。「財務官僚の若者のガザル」[表 2 : No. 70] には以下のような一節がある [SB: 47; 久保 2001: 43]。

私は妖精の顔をした者たちへの思いで気が変になり
財務官僚の若者の手で脚に枷をかけられている (band bar pāy)
我が心が彼のせいで何度も虐げられてきた (ẓulm basī dīda) というのに, どうして
彼の顔を見ようか, 私は自らの心の恨みを晴らしたい
私自身が困惑する様子を見ながら, 彼は圧制 (javr) を行ない続ける
哀れな私はかの佳人 (mah) のことで涙をこぼし, 困惑している

「脚に枷をかけられている」, 「何度も虐げられてきた」, 「圧制を行ない続ける」といった表現が, 財務官僚に関連する語句として用いられている。これは, もちろん恋心の強さと報われぬ恋を印象付けるためではあるが, サドルの場合と同じく, 文学上の技法を用いて, 高級官僚の横暴を風刺している, と考えることができる。

このように, サイフィーはトルコ系アミールや高級官僚に対しては, 彼らをマアシュークと見なした詩を詠みながら, その中に, 巧みに批判的なニュアンスを込めている。この点は, 先に見た職人や商人を題材とする, 洒落た趣きのガザルとは異なっている。サイフィーは, 社会的地位の低い者よりも, むしろ社会的地位が高く権威ある者を, 一貫した軽妙さでごまかしつつも, 揶揄・風刺しているのである。ここにサイフィーの社会観が反映されており, 先に確認したように, 彼が比較的くだけた感覚の持ち主であったとしても, おそらく当時の多くのペルシア文人やムスリム知識人の社会観と大きくは隔たっていないであろう。

5 宗教および宗教上の指導者についてのガザル

前節で紹介した類のガザル以外でも, 軽妙さの中に批判的なニュアンスが込められている場合がある。その一例が, 意外なことに, イスラームの有名な宗教儀礼でムスリムにとっての最も重要な義務の一つ, 「断食」[表 2 : No. 119] を題材としたガザルである。以下はその一節である [SB: 72; 久保 2001: 48]。

我が佳人 (māh) よ, なぜ断食の枷に囚われているのか
私の心と信仰 (dīn) を奪っておきながら, なぜ断食を行なうのか
我が佳人よ, 汝はなぜ苦行 (riyāḍ) に耐えられるのか, より良いのは
断食をやめ, 礼拝を打ち捨てることである
汝の断食破りは推奨されること (mustaḥabb) ではなく, 義務である (fariḍa)
我が魂である汝が断食の苦しみで衰弱しているのだから

このガザルでは断食という「苦行」を技芸と見なし、それを行なっている人物をマアシュークに見立て、断食を止めるようにと勧めている。マアシュークを思う気持ちを強調するためとはいえ、イスラーム法学上の術語を用いて、断食破りを「推奨されること」ではなく「義務である」と述べるくだり（5行目）は、不謹慎としか言いようがない。サイフィーは、断食という根本的な宗教上の義務を否定するほど、信仰心を失っていたのであろうか。

SBには宗教者を題材とした5編のガザルが含まれているが、サイフィー自身がイスラーム諸学を学んでいたにも関わらず、伝統的なイスラーム諸学を修めたムスリム知識人、つまりウラマーに属するのは「コーラン読唱者」[表2: No. 72]のみである。ほかは「スーフィー」[表2: No. 11], 「聖者」[表2: No. 34], 「神に魅せられた者」[表2: No. 52], 「ダルヴィーシュ」[表2: No. 103]と、いずれも神秘主義思想・スーフィズム上の指導者を題材としており、また聖者廟付属施設の管理者である「シャイフの子孫」[表2: No. 117]もこれに含めることができる²³⁾。おそらくサイフィーは、伝統的なイスラーム諸学の教授や形式的な宗教儀礼の指導を担うウラマーよりも、清貧を尊び神を感悟すべく修行の道を歩む者たちに好感を抱いていた。この点を最も明瞭に表わしているのが、以下の「ダルヴィーシュのガザル (ghazal-i darvishāna)」である [SB: 64; 久保 2001: 46-47]。

そのフェルトでできた魂の服を着れば長衣 (qabā) となる

この百片にもちぎれた心は彼への愛 ('ishq) で消滅する (fanā shudan)

我が聖王 (shāh) は親族縁者との交わりを断った、これが正しきダルヴィーシュである

私がこれから馴染もうとしている様々な喜びは

修行道の師の言行 (sunnat-i pīr-i ṭariqat) に従って行動すれば、味わえるものである

わが先達 (khvāja) は若くして世捨て人 (pārsā) となったのであろう

恋する者たち ('ushshāq) を殺すのにいくさは要らない

汝の目的は清らかさ (ṣafā) によって達成されるのだから

つまり、かの善き者たち (khūbān) の聖王はダルヴィーシュたることで [神への] 愛を抱き

貧しきサイフィーは彼への愛ゆえに乞食 (gadā) となるのである

「長衣」、「愛」、「消滅 (忘我の状態)」、「聖王」、「修行道の師の言行」、「先達」、「世捨て人」、「清らかさ」などダルヴィーシュに関連する語句が数多く盛り込まれている。神への「愛」ゆえに俗世間と絶縁し、清貧を尊んで修行道を歩むダルヴィーシュへの愛情を、非常に素直に表明しており、最後はダルヴィーシュへの「愛」ゆえに自らも清貧の道を歩むことを誓っている。他のガザルと同様、軽妙さを感じるが、揶揄・風刺を思わせる箇所はなく、それ以

23) 聖者廟 (mazār) には、ワクフ収益によって運営される修道場 (khānaqāh) などの慈善施設が付属しており、多くの場合、その施設のシャイフ職・ワクフ財産管財人 (mutavalli) 職は被埋葬者の子孫に与えられた。SBに見られる「シャイフの子孫」は、ガザルの内容から判断すると、聖者廟に付属する修道場のシャイフをつとめており、スーフィズム上の修行を指導している [SB: 71; 久保 2001: 42-43]。

上にダルヴィーシュに対する敬愛の念が印象に残る作品となっている。断食を不謹慎に否定したからといって、サイフィーの信仰心を疑うのは早計であり、彼は形式的な宗教儀礼より、ダルヴィーシュに見られるような、心からの誠実な信仰を尊んでいたと考えるべきである。

サイフィーのダルヴィーシュ観については、本章で先に一部紹介した「イマームザーデのガザル」[表2: No. 22] にも注目せねばならない。イマームザーデは、現代のイランにも見られ、願かけの対象であり、イマームの子孫の神通力による奇跡を願うシーア派民間信仰と結び付いている²⁴⁾。このガザルには以下のような一節がある [ŞB: 23; 久保 2001: 46]。

夜私はどのように礼拝の時刻まで辛抱しようか
私には半時も彼と離れていることはできない
彼と対面して私は[礼拝によって一日に]五度満足する
ダルヴィーシュの私は[そういう対面で]満足するばかりである
[ふつうは]彼の所へ必要な事なしに (bī-niyāzmandī) 行くことはできない
なぜならカアバ神殿には富に恵まれない者が行くものだから

このようにサイフィーは、願い事がなければイマームザーデに詣でることがないという、庶民の現世利益を求める態度を風刺する一方で、自らは礼拝するだけで満足するダルヴィーシュの立場を取っている。つまり、形式的な宗教儀礼と同じく、現世利益を求める庶民の態度に対しても、批判的な見方をしており、対照的にダルヴィーシュに見られる清貧さと神への誠実な愛に、本当の信仰を見出しているのである。

ダルヴィーシュ以外の宗教者を題材とするガザルにおいても、清貧さや神への愛の尊さが歌われており、サイフィーにとっての望ましい宗教上の指導者とは、先述ダルヴィーシュのガザルに見られた「修行道の師」や「先達」, 「スーフイーの佳人のガザル」[表2: No. 11] に見られる「感悟した指導者 (murshid-i ‘arif)」[ŞB: 18], あるいは「聖者のガザル」[表2: No. 34] に見られる「求道者たちの指導者 (murshid-i ahl-i ṭarīqat)」[ŞB: 29] などである。これらのうち「先達」の原語は「ホージャ」であり、当時最も有力であったタリーカ、ナクシュバンディーヤのシャイフの称号と同じである。

これは決して偶然の一致ではない。清貧を基礎とし隠棲を強要せずに労働を尊ぶナクシュバンディーヤは、15世紀半ばホージャ・アフラル Khvāja ‘Ubaydullāh Aḥrār (1404–90) の台頭にともなって盛んとなり、マワランナフルの宗教情勢を一新し、またティムール朝領土全域の政治・社会状況に大きな影響を及ぼした [久保 1999: 144–45]。ナクシュバンディーヤは、ヘラートにおいても流行し、君主スルターン・フサイン、その第一の側近でサイフィーの保護者アリーシールなどが、このタリーカの支持者となり、サイフィーと交流のあった当代随一のペルシア詩人ジャーミーは、ナクシュバンディーヤのシャイフとして

24) 当該時代のヘラートにおいて、存在が確認できるイマームザーデ廟には、旧城塞内のイマームザーデ・アブドゥッラー (Mazār-i Imāmzāda ‘Abdullāh) があり、そのシャイフ・ワクフ財産管財人の任命書の写しが残っている [MI: 144]。

も高名であった〔ウルンバーエフ 1997〕。それゆえ、サイフィーの作品に見られる神秘主義思想・スーフィズムへの傾斜の背景には、ナクシュバンディーヤ思想の影響を見出すべきであろう。そうすると、このタリーカは、周知のごとく社会の幅広い層で信者を獲得していたのであるから、サイフィーの宗教観は、決して特殊なものではなく、むしろ当時の主流をなすものであったと考えることができよう。

本章の考察結果をまとめると、以下ようになる。ヘラートのサロン文化の洗礼を受けたサイフィーによるシャフル・アーシューブ作品 \$B\$ は、職人や商人を主な題材とし、彼らに対する恋慕の情を歌ったガザル集である。軽妙で洒落た味わいのある 124 編のガザルが収められ、作品全体としても軽妙さを特徴としており、娯楽・気晴しを目的とした大衆文学を思わせる。このような作品が生み出された要因は、都市文化の発達による職人・商人層の社会的地位の向上、および都市社会の成熟であると考えられる。職人や商人ではなく、社会的地位の高い人々を題材としたガザルもあるが、これらには批判的ニュアンスや揶揄・風刺が感じられ、サイフィーの社会観を反映している。また宗教や宗教上の指導者を題材としたガザルについては、形式的な宗教儀礼や現世利益を求める庶民の態度への、批判や風刺が込められており、誠実な信仰としての神秘主義思想・スーフィズムに傾斜した宗教観が反映されている。

いまティムール朝ルネサンスなる表現との関わりにおいてサイフィーの作品をとらえ直すと、社会的地位の高いトルコ系アミールや高級官僚への批判であれ、伝統的宗教儀礼や民間信仰の軽視であれ、個人の自由な精神に基づく創作活動をほのめかしていると言えることができる。もちろん、サイフィーの社会観や宗教観は決して特殊なものではなく、彼が比較的くだけた感覚の持ち主であったとしても、当時のイラン系文人やムスリム知識人の多くと共通するものであったと考えられる。また宗教観については、ナクシュバンディーヤ流行の影響があり、社会のかなり幅広い層と共通していたであろう。しかし、問題はサイフィーの宗教観や社会観の独自性ではなく、社会的地位に伴う権威や伝統的な信仰形態に批判の目を向けた、自由な精神を感じさせる作品の登場、およびそれを容認した当時の社会状況にある。後に述べるように、この作品が、一般住民である職人や商人の間でも親しまれたと考えられることから、当時のヘラートの社会が成熟度を増し、かなり自由な社会観や宗教観が、幅広い層で確認し得る状況になっていたのではなかろうか。

Ⅲ ペルシア韻文学の隆盛と都市社会の成熟

1 ヘラートにおける職人・商人層の台頭

上に述べたように、ティムール朝ルネサンスは建築文化や美術・工芸の分野に代表されているが、ペルシア文学においても特筆すべき韻文作品が生み出されている。その背景には、

ルネサンスという現象の土壌となる、都市社会の成熟があり、社会における個の成長が、個人の自由な精神に基づく創作活動を可能にしたと考えられる。ティムール朝ルネサンス期におけるヘラートの社会の成熟、および個の成長を裏付けるのが、広い意味で都市文化・都市生活を支えた職人・商人層の台頭である。

当該時代のヘラートにおける職人・商人層の台頭は、すでにシャフル・アーシュブ作品の復興によって裏付けられているが、15世紀末から16世紀初頭にかけてヘラートで活躍した文人・歴史家で、ティムール朝末期にサドルに任じられたこともあるホーングミール (c. 1475 – c. 1535) のインシャー作品集 NN²⁵⁾ が、さらに重要な点を明らかにしてくれる。ホーングミールはこの書の中に「中間層の人々 (avāsiṭ al-nās) にふさわしい書簡の例」(第3章) および「職人 (muḥtarifāt) への書簡の例」(第4章) と題する二つの章を設け、それぞれ17通と28通の書簡例を収めている [NN: 68 a–95 a]。これらの書簡の受信人は特定の職業を有する者で、文面は、冒頭のルバーイーにはじまり²⁶⁾、その職業に関連する語句が盛り込まれている。以下の職種について各々一つの節が設けられている(数字は節番号)。

第3章「中間層の人々にふさわしい書簡の例」

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| 1) 農民 (arbāb-i vilāyāt; dahāqin) | 2) 試金師 (ṣāhib-‘iyār) |
| 3) 画家 (naqqāsh; muṣavvir) | 4) 交易商 (tujjār) |
| 5) 建築家 (mi‘mār) | 6) 製本職人・装丁職人 (ṣaḥḥāf; mujallid) |
| 7) 兵士・射手 (aṣḥāb-i qabḍa; tirandāz) | 8) 朗唱家・演奏家 (khvānanda; ahl-i sāz) |

第4章「職人への書簡の例」

- | | | |
|-------------------|--------------------------|-------------------|
| 1) 両替商 (ṣarrāf) | 2) 菓子職人 (qannād) | 3) 香薬商人 (‘aṭṭār) |
| 4) パン職人 (khabbāz) | 5) 料理人 (āshpaz) | 6) 肉屋 (qaṣṣāb) |
| 7) 服地屋 (bazzāz) | 8) 賜衣仕立て屋 (khil‘atdarzī) | |
| 9) 染色職人 (rangriz) | 10) 馬具職人 (sarrāj) | 11) 大工 (durūdgar) |
| 12) 鍛冶屋 (āhangar) | 13) 雑貨屋 (baqqāl) | 14) 風呂屋 (ḥammāmi) |

第3章に見られる「中間層の人々」の職種は、職人と呼べるものを中心であり、また第4章に見られる職種のほとんどが、サイフィーのシャフル・アーシュブ作品の題材となった職種と重複している。第4章の冒頭で編著者ホーングミールは以下のように述べている。

25) このインシャー作品集の編纂が完了したのは1522/23～1528年サファヴィー朝下のヘラートであるが、収録されているインシャー作品のほとんどが、ティムール朝末期のものや、その頃の形式を忠実に受け継いだものである。公文書については、著者ホーングミールが、ティムール朝滅亡後バルフに政権を樹立したティムール朝の王子ムハンマド・ザマーン・ミールザー Muḥammad Zamān Mirzā に仕えていた時期(1514–17)に作成されたものを中心と考えられる。なお、ホーングミールの主な著作については、ユスーポフ 1997 を参照のこと。

26) ゴルチーネ・マアーニーは、このような、NN 所収書簡の冒頭にあり、受信者の職業・専門に関連する語句を盛り込んだルバーイーを、シャフル・アーシュブ作品のうちに数えた [Gulchīn-i Ma‘āni 1968: 31]。確かにこれらのルバーイーは、他のシャフル・アーシュブ作品と何ら異ならないので、本稿でもゴルチーネ・マアーニーの見解に従った [表2: No.9]。

古の書記たち (munshiyān) やその後の文人たち (sukhanvarān) は、職人や商人 (jamā'at-i muḥtarifāt va sūqiya) のいかなる人々にあてても、個別に書簡を作成することはなかった。この集団の中に時折優れた才能の持ち主が見出されるので、この書の 14 の節を彼らの幾人かにあてて記した。[NN: 79 b]

つまり、当該時代になってはじめて、ホーンドミールのような文人・知識人が、個々の職人や商人宛に書簡を作成するようになった、というのである。さらに、注意すべきことは、各職業について、往信の例だけでなく返信の例をも含む 2 通の書簡例が収められていることである²⁷⁾。これは、当時職人や商人の方からも、文人・知識人宛に書簡が送られていたことを裏付けている。

もし職人や商人が、代筆ではなく、自ら文人・知識人宛に書簡をしたためていたのであれば、ティムール朝ルネサンス期に見られる都市社会の成熟は、一般住民層の社会的地位のみならず、その教養の水準をも著しく向上させていたことになる。上に引用した箇所ではホーンドミールが「この集団 [=職人・商人] の中に時折優れた才能の持ち主が見出される」と述べているように、アリーシールの保護を受けていた著名なペルシア詩人のビナーイーは、ヘラートの「中間層の出身」であり、「建築家」の息子であった [久保 1990: 40, 49; 久保 1997 a: 27-28]。また当時のヘラートの文人・知識人の状況を最も詳しく伝える回想録 BV には [Boldyrev 1947; Subtelny 1984], 職人や商人の職業名を伴った文人・知識人が頻繁に登場する²⁸⁾。ティムール朝ルネサンス期のヘラートでは、職人や商人が十分な教養を身につけることは、決して珍しくはなかった、と考えてよかろう。

2 16 世紀の詩人伝に登場する職人・商人

都市社会の成熟によって、ヘラートの一般住民の教養水準が向上したことは、ティムール朝ルネサンス期をやや下って著わされた詩人伝によって、さらに明瞭に裏付けることができる。当該時代以降、ヘラートのみならず、ペルシア語文化圏の様々な都市において、韻文学の心得のある職人や商人が増えてきていた。

27) 第 3 章と第 4 章では、各職種について往信と返信の 2 通の書簡例が収められているが、第 3 章第 3 節「画家たち (naqqāshān va muṣavvirān) にふさわしい文案の作成について」だけは 3 通で、往信例と返信例のほかに、ホーンドミールが画家ビフザードの代筆をして、画家カースィム・アリー・チェフレゴシャー Ustād Qāsim 'Alī Chihra-gushā から書簡に対してしたための返信が収められている [NN: 70 b-72 b]。カースィム・アリーはアリーシールの図書館で画家として成長した人物である [KhA: 242]。

28) ティムール朝末期のヘラートで活躍していたと考えられる文人・知識人では、ビナーイー以外に、両替商 (ṣarrāf), 宝石研磨師 (ḥakkāk), 刃物職人 (sakkāk), 臘燭職人 (sham'rīz), 油職人 (ravghangar), 馬具職人 (sarrāj), 金刺繍師 (zardūz), 革布職人 (naṭ'dūz), 製本職人 (ṣaḥḥāf), 絹職人 (abrīshamkār), 潜水夫 (ghavvāsh), 帆布商人 (karbāsfurūsh) などの職業名を伴った人物が登場する [BV: 19, 26, 31, 38; 105; 199, 213; 316; 526; 527; 527; 527; 527, 534; 1115; 1208; 1223]。ただし、その人物が上記の職業に従事していたとは限らず、父親の職業を示している可能性もある。

1521-23年ヘラートで完成された詩人伝 LN の第9章には、15世紀末から16世紀初頭にかけてホラーサーンとマーワランナフル、特にヘラートにおいて頭角を現わし、詩を詠んだ187名の人物の略伝とその作品の一部が収められている²⁹⁾。この章の全9節のうち第6節は「その他の庶民 (sāyir-i 'avāmm) の優美さの叙述」と題されている [LN: 148-69]。ここには、人数的には全9節中最大の118名の人物が取り上げられており、うち30名前後がヘラートで活躍した人々である。この118人は、節の表題から判断する限り、みな「庶民」であり、各人の解説文の中で「一般人 (mardi 'āmmi)」と明記されている場合もある [LN: No. 448, 530, 542]³⁰⁾。ここで言う「庶民」は、特別な家系には属さず、社会的地位も、前節で見られた「中間層」より低い人々であると考えられる³¹⁾。彼らの多くは職業詩人ではなく、その生業は多様であり、職人や商人も少なくない。その職種には、サイフィーの作品の題材となっているもの、つまり本稿表2に見られる職種、およびそれ以外の職人や商人の職種もあり、合計14名が、専業的・副業的あるいは一時的に、下記の合計19種の職業に従事していた³²⁾。

【表2と重複する職種】

- | | | |
|---|----------|---------|
| 1) 染色職人 (afshāngar; siyāhīgar; rangkār) | 2) フーテ商人 | 3) 土壁職人 |
| 4) 矢職人 | 5) 服地屋 | 6) 交易商 |
| | | 7) 衣料職人 |

【表2と重複しない職種】

- | | |
|------------------------------------|--------------------------------|
| 1) カーヌーン奏者 (qānūnnavāz) | 2) 白楊皮職人 (tūzpūsh) |
| 3) コルーチュ料理人 (kulūchapaz) | 4) 宝石研磨師 (ḥakkāk) |
| 5) 画家 (naqqāsh; muṣawwir) | 6) 染色・油職人 (rang-u-ravghan-kār) |
| 7) 絹職人 (abrishmakār) | 8) ラピスラズリ洗浄師 (lājvardshū) |
| 9) 金銀粉装飾師 (basmakār) | 10) 砂占師 (rammāl) |
| 11) 食器絵師 (naqqāsh-i kāsa va ṭabaq) | 12) ネイ奏者 (naynavāz) |

取り上げられた118人の「庶民」のうち、職人・商人の職種以外では、ダルヴィーシュが6名、王族や有力者の庇護を得た者および官職を得た者（サドルや蔵書管理官）が10名、「コーラン暗記者 (ḥāfiẓ)」, 「コーラン読唱者 (qārī; muqrī)」, 「医師 (ṭabīb)」が各1名、マドラサ等での「就学者 (ṭālib-i 'ilm)」もしくは就学経験者とされる者は19名に上り、

29) LN の全9章のうち第1章から第8章はMN（チャガタイ・トルコ語）のペルシア語訳であり、第9章はMN 完成後に活躍した詩人を取り上げている。

30) 以下LN の該当箇所の表示は、頁ではなく、取り上げられた人物に付された通し番号による。

31) 当時の庶民については、不明な点も多いが、政府や国家から見た「臣民 (ra'āyā; ra'iyat)」とは明らかに範疇が異なる。BV に見られる用法では、「一般人 ('āmmi)」や「庶民 ('avāmm al-nās)」に対して、「イスラーム知識人 ('ālim)」および「ウラマーや学識者たち (ahl-i faql-u-kamāl; arbāb-i dānish-u-ifḍāl)」が対義語的に用いられている [BV: 536; 914]。家系や職業もさることながら、イスラームに関する本格的な学識の有無が重視されていたようである。

32) 人名に職人・商人の職業名が伴われていても、祖先の職業に由来する筆名に過ぎない可能性がある場合は除いた。また画家と楽師は職人に含めたが、能書家は除いた。なお、該当する14名は、LN: No. 437, 441, 443-44, 448-49, 453-54, 458, 466, 480, 528, 534, 538 である。

能書家もしくは書を得意としていた者が8名いる（重複を含む）³³⁾。本来は職人・商人層に属しながら、就学していた者や書家として活動していた者も見受けられる [LN: No. 435, 449]。つまり、職人・商人層を含む当時の「庶民」にとって、韻文学や書の心得があるのは決して特別なことではなく、ムスリム知識人としての学識を備える場合さえあったのである。その教養水準の高さを物語るかように、118人中「読み書きができない (khaṭṭ va savād na-dārad)」と明記されている人物は、唯一人しかいない [LN: No. 532]。

LN よりさらに時代を下って、1550 年前後に完成された詩人伝 TS には、15 世紀末から 16 世紀半ばにかけて、ペルシア語文化圏、主にサファヴィー朝の版図において韻文作家として活躍した人々の、略伝とその作品の一部が収められている。全7章のうち第5章は「筆名で有名な詩人たちの叙述」[TS: 143-333]、第7章は「新奇なことを言う者 (ṭurfa-gū) たちとその他の庶民 (sāyir-i 'avāmm)」[TS: 361-76] と題され、それぞれ 370 人と 46 人、合計 416 人が取り上げられている。第7章で取り上げられた者たちは、表題にある通り「庶民」に属すると考えられるが、第5章に登場する詩人の中にも「一般人」と明記されている人物が見受けられる [TS: No. 290, 363, 400, 570]³⁴⁾。そして、第7章のみならず第5章で取り上げられた者たちについても、LN でも確認したように、職人や商人の職業に従事している場合が少なくない。第5章と第7章で合計 99 名の者が、以下の 63 種の職業に、専業的・副業的もしくは一時的に従事していた³⁵⁾。

【表2と重複する職種】

- | | | | |
|-----------------|-------------------------|----------|-------------------------|
| 1) ハルワー商人 | 2) 農民 (barzgar; dihqān) | 3) 画家 | 4) 香薬商人 |
| 5) 宝石細工師 | 6) 土壁職人 | 7) 絹商人 | 8) 弓職人 (qūsi; kamāngar) |
| 9) 水運び人 (saqqā) | 10) 装丁職人 | 11) 絹布職人 | 12) 両替商 |

33) それぞれ該当する人物は、ダルヴィーシュは LN: No. 442, 450, 464, 472, 501, 537, 王族・有力者の庇護を得た者や官職を得た者は No. 452, 465, 475-76, 479, 483, 494, 529, 539, 548, コーラン暗記者は No. 447, コーラン読唱者は No. 474, 医師は No. 467, マドラサ等での就学者もしくは就学経験者は No. 436, 438-39, 449, 451, 460, 462, 464, 472, 481, 485, 488, 492, 500, 502, 509, 526, 544-45, 能書家もしくは書を得意としていた者は No. 435, 460, 492-93, 523, 536, 546, 548 である。

34) TS の第5章は、第1節「偉大なる詩人たちと雄弁なるウラマーの叙述」[TS: 143-249/No. 265-353] と第2節「その他の詩人たち」[TS: 250-333/No. 354-634] に分かれており、第1節では、主に家柄の良い者や学識を備えた者が取り上げられている。しかし、その第1節においてさえ、もとコリーチェ料理人で「一般人であるので、自らの言葉をほとんど理解していない」という人物が取り上げられている [TS: No. 290]。なお、TS の当該箇所についても、LN の場合と同様、適宜人物に付された通し番号を表示する。

35) LN から抽出した場合と同じく画家・楽師・朗唱家を含め、また、人名に職人・商人の職業名が伴われていても、本人の職業と確定できないものは除いた。なお、該当する 99 名は TS: No. 283, 288-90, 298, 319, 330, 339, 360-64, 368, 374, 376, 378-80, 382, 386-87, 389-90, 392-93, 400, 406, 413, 416-17, 420, 424, 427, 429, 432, 434-35, 446-47, 450, 454, 460, 481-82, 484, 487, 489-90, 500, 510, 522, 527, 532, 538-39, 543, 547-48, 551, 556, 558, 565, 576, 581, 583-84, 586, 588, 590-91, 593, 597, 599, 605-06, 608, 610, 613, 620, 634, 671, 673-74, 677-78, 680-81, 683, 687, 692, 696-97, 699-702, 707-08 である。

- | | | | |
|----------|---------------------|----------------------|--------------------|
| 13) 冠職人 | 14) 楽士 (muṭrib) | 15) 帆布商人 | 16) 靴職人 |
| 17) 鍛冶屋 | 18) 目医者 | 19) 朗唱家 | 20) 仕立て屋 (khayyāt) |
| 21) 針職人 | 22) 理髪師 (sartarāsh) | 23) 飼料屋 | 24) 矢職人 |
| 25) 肉屋 | 26) 釘職人 | 27) 風呂屋 (ḥammāmīgar) | 28) カッレ料理人 |
| 29) 物語り師 | 30) 服地屋 | | |

【表 2 と重複しない職種】

- | | | |
|-------------------------|-----------------------------|-------------------|
| 1) 食器職人 (kāsaḡar) | 2) コリーチェ料理人 (kulichapaz) | |
| 3) 料理人 (ṭabbākh) | 4) 麝香商人 (mishkfurūsh) | |
| 5) ターバン巻き (dastārband) | 6) 蜂蜜商人 (‘asalfurūsh) | |
| 7) 紐職人 (‘alāqaband) | 8) 帯職人 (kamarbāf) | |
| 9) 皮革職人 (pūstīndūz) | 10) ボタン職人 (tukmaband) | |
| 11) ヤフニー料理人 (yakhnipaz) | 12) 鞍あて職人 (takaltūdūz) | |
| 13) 小売商人 (khurdafurūsh) | 14) ラピスラズリ洗淨師 (lāzhvardshū) | |
| 15) 本屋 (kitābfurūsh) | 16) 交易商 | 17) 建築家 (bannā) |
| 18) 仲買商人 (bayyā‘) | 19) 宝石研磨師 | 20) 砂占師 |
| 21) 小刀職人 (kārdgar) | 22) 搾油職人 (‘aṣṣār) | 23) 製本職人 |
| 24) 裁縫師 (khayyāṭatāb) | 25) 毛皮職人 (mūīnadūz) | 26) 馬具職人 |
| 27) 紙商人 (kāghadhfurūsh) | 28) 刀剣職人 (shamshirgar) | 29) 錠職人 (quflgar) |
| 30) 金刺繡師 (zarkash) | 31) 陶器商人 (chīnīfurūsh) | 32) 造園師 (bāghbān) |
| 33) 棍棒職人 (chunāqgar) | | |

TS の第 5 章と第 7 章に登場する 416 名のうち、4 分の 1 弱の 99 名が上記のような職人・商人の職業に従事しており、本人ではなく父親の職業が上記の諸職に含まれる者を加えると、さらに比率が高まることになる。これら職人・商人層に属する者たちは、詩を詠むだけではなく、先に LN で確認したように、おそらく読み書きの能力をも備え、学識豊かな者も珍しくはなかったであろう。第 5 章には、もと麝香商人が書を得意としている例が見られ [TS: No. 339]、「庶民」を取り上げた第 7 章においても、書写に従事した者や書を得意とした者が見受けられる [TS: No. 684, 686]。さらに、同じく第 7 章には「財産が多いのでタブリーズに一つのマスジドを建てた」という「慈善家で学識者 (khayyir va ‘ālim)」とされる人物が登場する [TS: No. 698]。都市の発達による経済的安定が、一般住民層の教養・学識を高める重要な要因であったことを物語っている。また、TS の当該部分では、マドラサ等での就学についてあまり述べられていないが、第 5 章に 7 名の「マクタブ (初等教育施設) 経営者 (maktab-dār)」が取り上げられており [TS: No. 320, 388, 396, 436, 503, 513, 625]、マクタブ経営が「技芸 (ṣan‘at)」と見なされている [TS: No. 320]。これらの者たちの居住地は、タブリーズ、イスファハーン、シーラーズ、ハマダーン、テヘラン、トゥーンであるが、他の主要都市でもマクタブ経営が盛んであったと思われる。

16世紀の詩人伝 LN と TS の違いは、前者が、15世紀末から16世紀の第1四半世紀にかけてヘラートを中心にホラーサーンとマーワランナフルで活躍した者たちを取り上げているのに対し、後者は15世紀末から16世紀前半に主にサファヴィー朝の版図で活躍した者たちを取り上げていることである（ただし、LN と TS で人物が重複している場合もある）。TS で取り上げられた人々の主な活動の舞台は、都市文化が衰退へと向かうヘラートよりも〔久保 1997 b: 172-73〕、タブリーズ、カズヴィーン、カーシャーンなどサファヴィー朝中心部の主要都市であった。これらの都市においても、上に見たように、16世紀前半には、職人や商人に代表される都市の一般住民層が、韻文学の素養をはじめ、教養・学識を身につけることは決して珍しくはなかったのである。ティムール朝ルネサンス期のヘラートと同様な都市社会の成熟が、ペルシア語文化圏ほぼ全域に広まってきていたとすることができよう³⁶⁾。

おわりに

15世紀末ヘラートの職人や商人を主な題材としたサイフィーのシャフル・アーシューブ作品は、都市文化の発達および都市社会の成熟が生み出した、大衆文学を思わせるペルシア韻文作品であった。都市社会の成熟は、この作品の題材となった職人・商人層、および広く一般住民層の、社会的地位のみならず教養の水準をも著しく向上させ、詩を詠み書をしたためる職人や商人の存在はありふれていたと言っても過言ではない。彼らはサイフィーの作品の題材となっただけでなく、サイフィーの作品を自ら味わい、社会観や宗教観にからめたサイフィーのメッセージを十分に汲み取る力を持っていた、と考えてよからう³⁷⁾。作者の社会観や宗教観が反映された文学作品を味わい、自らも簡単な韻文作品を創作できる者が、都市の一般住民層に広く確認できるという社会状況が生じていたのである。換言するなら、ティムール朝ルネサンス期のヘラートでは、社会における個の成長が著しく、社会の幅広い層で個人の自由な精神が育ってきていた、とすることができよう。

そうすると、ペルシア語文化圏におけるその後のシャフル・アーシューブの流行は、当該地域で広く都市社会の成熟が見られるようになったことを裏付けることになる。上に述べたように、シャフル・アーシューブ作品が職人や商人を題材とするということだけでなく、そ

36) アゼルバイジャンやイラクでもサファヴィー朝成立以前に都市文化が発達していたと思われるが、ヘラートに比べると文献史料が非常に少なく、いまだ十分な研究成果が得られていない。なお、マーワランナフルは15世紀後半以降都市文化が衰退したとされるが、発展が見られないわけではない〔ムクミノーワ 1998〕。

37) 日本にも類似する韻文学のジャンル「職人歌合わせ」があり、古くは鎌倉時代のものが残っている。「歌合わせ」は、9世紀後半から始まった和歌による宮廷遊戯であり、「職人歌合わせ」は、種々の職人による歌合わせという設定であるが、実際の作者は職人ではなく上流階級の歌人であった。また、その歌を職人たちが自身が味わうということも、随分後の時代までなかったものと思われる。なお、「職人歌合わせ」については先述の比較中世史料研究会（本稿注5）において、出席者の方々からご教示いただいた。

の大衆文学的性格から見て、彼らに代表される都市の一般住民層にも親しまれることを目的としていた、と考えられるからである。実際、第Ⅲ章で確認した通り、16世紀前半にティムール期ルネサンス期のヘラートと同様な都市社会の成熟がペルシア語文化圏ほぼ全域に広まってきており、サイフィーの作品以降、次々とシャフル・アーシューブ作品が生み出された。16世紀初頭再びヘラートでアーガヒーとホーンダミールの作品が生まれたが〔表2：No.8, 9〕、その後はタブリーズ、カズヴィーン、イスファハーンなどサファヴィー朝下の主要都市で、続々とシャフル・アーシューブ作品が編まれた〔表2：No.11-17, 19-22, 26-29〕³⁸⁾。このような状況は、ペルシア韻文作品が幅広い層で大衆的に親しまれるという、イランの伝統〔藤元 2001〕の形成とも深く関わっているであろう。

翻ってサイフィーのシャフル・アーシューブ作品について言うと、この作品の登場は、既に確認したように、シャフル・アーシューブ史上の転換機、およびこの文学ジャンルの復興を意味した。しかし、その重要性は、この作品を生み出した社会状況との関わりにおいて、より適切に把握することができるのであり、そうすることで、その後のシャフル・アーシューブ流行の意味が解き明かされるのである。今後本稿の考察結果に修正を加える必要が生じるとしても、サイフィーのシャフル・アーシューブ作品の文学・歴史研究上の重要性は明らかであり、ティムール朝ルネサンスを象徴するペルシア文学作品、と呼ぶことも不可能ではないであろう。

参 考 文 献

- BN: Bābur, Ṣāḥib al-dīn Muḥammad, *Bābur-nāma/Vaqā'i*, ed. Mano, E. (間野英二) Kyoto, 1995.
- BN/J: 間野英二『バーブル・ナーマの研究Ⅲ 訳注』松香堂, 1998年.
- BV: Vāṣifī, Ṣayn al-dīn Maḥmūd, *Badā'i' al-Vaqā'i*, ed. Boldyrev, A. N. Moscow, 1961.
- DK: Muḥammad b. Hindū-shāh Nakhchavānī, *Dastūr al-Kātib*, ed. 'Alī-zāda, A. A., vol. 2. Moscow, 1976.
- DM: *Divān-i Mas'ūd Sa'd Salmān*, ed. Nāṣir Hayyirī. Tehran, 1362 (1983).
- ḤS: Khvāndamīr, *Ḥabīb al-Sīyar fī Akhbār Afrād al-Bashar*, 4 vols. Tehran, 1333 (1954).
- KB: Sanā'i Ghaznavī, *Kār-nāma-yi Balkh*, ed. Mudarris Riḡavī, M. *Farhang-i Īrān-zamīn* 3 (4).
- KhA: Khvāndamīr, *Khātima-yi Khulāṣat al-Akhbār*, ed. Mīr Hāshim Muḥaddith. In: Khvāndamīr, *Ma'āthir al-Mulūk*, ed. Mīr Hāshim Muḥaddith. Tehran, 1372 (1993/94).
- KZ: Ḥājji Khalīfa, *Kashf al-Zunūn 'an Asāmi al-Kutub va al-Funūn*, 2 vols. Beirut, 1992.

38) シャフル・アーシューブ作品を詠んだトルコ詩人6名がKZに挙げられていることは先に述べたが、この6名はいずれも16世紀に活躍した詩人であるから、この頃のトルコ語文化圏においても、都市文化の発達とシャフル・アーシューブの流行を関連付けられるのではなかろうか。

- LN: Fakhri Hirāti, Sulṭān Muḥammad, *Laṭā'if-nāma*, ed. 'Alī 'Aṣghar Ḥikmat. In: Navā'i, Amīr Nizām al-dīn 'Alī-shīr, *Tadhkira-yi Majālis al-Nafā'is*, ed. 'Alī 'Aṣghar Ḥikmat. Tehran, 1945.
- MI: 'Abd al-Vāsī' Nizāmī, *Mansha' al-Inshā'*, ed. Shihāb al-dīn Aḥmad Khvāfi/Humāyūn-i Farrukh, R., vol. 1. Tehran, 1357 (1979).
- MN: Navā'i, Amīr Nizām al-dīn 'Alī-shīr, *Majālis al-Nafā'is*, ed. G'anieva, S. Tashkent, 1961.
- NN: Khvāndamir, *Nāma-yi nāmī*. MS., Kitābkhāna-yi Millī-yi Tabriz, No. 2757.
- ŞB: Sayfī Bukhārī, *Şanā'ī' al-Badā'ī'*, ed. Hiravī, N. M. *Dānish* 10 (Islamabad, 1987).
- TS: Sām Mirzā Şafavī, *Tuḥfa-yi Sāmī*, ed. Fumāyūn-i Farrukh, R. Tehran, 1347 (1969).
- TSh: Amīr Dawlat-shāh Samarqandī, *Tadhkirat al-Shu'arā'*, ed. Browne, E. G. Repr., Tehran, 1338 (1959 / 60).
- Allen, T. (1981) *A Catalogue of the Toponyms and Monuments of Timurid Herat*. Cambridge, Mass.
- Bahari, E. (1997) *Bihzad: Master of Persian Painting*. London • New York.
- Boldyrev (1947) *Болдырев, А. Н.* Очерки из жизни гератского общества на рубеже XV–XVI вв. — Труды Отдела Востока Государственного Эрмитажа. Т. 4.
- Browne, E. G. (1924) *A History of Persian Literature*, vol. 4: Modern Times (1500–1924). Repr., Cambridge • London • New York • Melbourne, 1978.
- Golombek, L. & D. Wilber (1988) *The Timurid Architecture of Iran and Turan*. 2 vols. Princeton.
- Gulchīn-i Ma'ānī, A. (1968) *Shahr-āshūb dar Shi'r-i Fārsī*. Tehran.
- Keyvani, M. (1982) *Artisans and Guild Life in the Later Safavid Period*. Berlin.
- Lentz, T. W. & G. D. Lowry (1989) *Timur and the Princely Vision: Persian Art and Culture in the 15th Century*. Los Angeles • Washington.
- Maḥjūb, M. J. (1967) Shahr-āshūb. In: Maḥjūb, M. J., *Sabk-i Khurāsānī dar Shi'r-i Fārsī*. Tehran.
- Hiravī, N. M. (1987) Yāddāsht-i Muṣaḥḥiḥ. In: ŞB.
- O'Kane, B. (1987) *Timurid Architecture in Khurasan*. Costa Mesa.
- Miklukho-Maklay (1963) *Миклухо-Маклай, Н. Д.* Хондамир и „Записки“ Бабура. — Тюркологические исследования. Москва-Ленинград.
- Mukminova (1976) *Мукминова Р. Г.* Очерки по истории ремесла в Самарканде и Бухаре в XVI веке. Ташкент.
- Roemer, H. R. (1986) The Successors of Timūr. *The Cambridge History of Iran*, vol. 6: The Timurid and Safavid Periods. Cambridge.
- Shamisā, S. (1996) *Farhang-i 'Arūḍī*. 3rd ed. Tehran.
- Subtelny, M. E. (1984) Scenes from the Literature Life of Timurid Herat. In: Savory, R. &

- D. Agius (eds.) *Logos Islamikos: Studia Islamica in Honorem Georgii Michaelis Wickens*. Toronto.
- Subtelny, M. E. (1988) Socioeconomic Bases of Cultural Patronage under the Later Timurids. *International Journal of Middle East Studies* 20 (4).
- R. グルッセ (後藤十三雄訳) (1944) 『アジア遊牧民族史』 三一書房. (原書房, 1979.) [Grousset, R. *L'empire des steppes. Attila. Gingis-Khan. Tamerlan*. Paris, 1939.]
- R. G. ムクミーノワ (久保一之訳) (1998) 15 世紀～19 世紀半ばの中央アジア都市 『西南アジア研究』 49.
- D. Iu. ユスーボワ (磯貝健一訳) (1998) 16 世紀中央アジア文化史の史料としてのホーンデミールの作品 『西南アジア研究』 49.
- 久保一之 (1990) ミール・アリー・シールの学芸保護について 『西南アジア研究』 32.
- 久保一之 (1996) イスラーム期中央アジア古文書学の成果と 16 世紀ブハーラーの法廷文書書式集 『東洋学報』 78 (2).
- 久保一之 (1997 a) ビナーイーの『シャイバーニー・ナーマ』について 『平成 6～8 年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (A) (1) 「トルコ・イスラム時代中央アジア文化の総合的研究」 (課題番号 06301043/ 研究代表者: 間野英二) 研究成果報告書』.
- 久保一之 (1997 b) ティムール朝とその後 —— ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き —— 『〈岩波講座世界歴史〉 11 中央ユーラシアの統合 (9～16 世紀)』 岩波書店.
- 久保一之 (1999) ティムール帝国 間野英二編 『〈アジアの歴史と文化〉 8 中央アジア史』 同朋舎・角川書店.
- 久保一之 (2001) ティムール朝末期ヘラートのシャフル・アーシューブ —— サイフィー・ブハーリー作『驚くべき者たちの技芸』抄訳 —— 平成 10～14 年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「古典学の再構築」総括班編 『平成 11～12 年度公募研究論文集』.
- 黒柳恒男 (1977) 『ペルシア文芸思潮』 (世界史研究双書 23) 近藤出版社.
- 小松久男 (1991) 中央アジア 羽田正・三浦徹編 『イスラム都市研究 [歴史と展望]』 東京大学出版会.
- 菅原 睦 (1998) チャガタイ・トルコ語の成立と文学的伝統 『アジア言語論叢 (神戸市外国語大学)』 2.
- 藤元優子 (2001) カフヴェハーネとソハンヴァリー —— イランの詩合戦 —— 『中東イスラム・アフリカ文化の諸相と言語研究』 大阪外国語大学.

(京都大学大学院文学研究科)